三沢南崎遺跡2

小郡市文化財調査報告書　第241集

2009

小郡市教育委員会

三 沢 南 崎 遺 跡 2

- 小郡市三沢字南崎所在遺跡の調査報告 -

小郡市文化財調査報告書第　集

2009

小郡市教育委員会

三沢南崎遺跡 2

- 小都市三沢字南崎所在遺跡の調査報告 -

小都市文化財調査報告書第　集

2009

小都市教育委員会

本文目次

序　例言　凡例
　調査の経緯と経過
　1　調査の経緯
　2　調査の組織
　3　調査の経過
　位置と環境
　1　地理的環境
　2　歴史的環境
　遺構と遺物
　1　調査の概要
　2　第１遺構面の遺構と遺物
　3　第２遺構面の遺構と遺物
　4　１号流路
　5　その他の出土遺物
　三沢南崎遺跡２における自然科学分析
　1　分析資料の採取について
　2　プラント・オパール分析
　3　花粉分析
　調査成果のまとめと検討
抄録　奥付

挿図目次

第１図　小都市地形図
第２図　調査区位置図　S
第３図　周辺遺跡分布図　S
第４図　調査区全体図　第１遺構面　S
第５図　調査区全体図　第２遺構面　S
第６図　区暗渠南壁トレンチ土層断面　S
第７図　区調査区南壁・　区調査区北壁土層断面　S
第８図　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　S
第９図　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区１号流路　第３段階　出土木製品　S
第　図　区出土土器　S　・石器　S
第　図　区出土土器　S
第　図　区出土石器・土製品　S　９のみ
第　図　三沢南崎遺跡２のプラント・オパール分析結果
第　図　三沢南崎遺跡２における花粉ダイアグラム
第　図　流路変遷案　S
第　図　調査区周辺の詳細遺跡分布　S

表１　三沢南崎遺跡２のプラント・オパール分析結果
表２　三沢南崎遺跡２における花粉分析結果

Ⅱ．位置と環境

（１）地理的環境

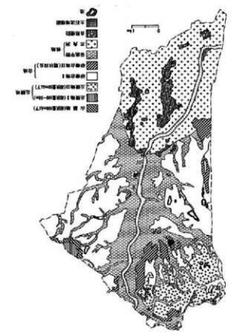
小都市域は北から南へ流れる宝満川によって二分され、右岸には北西部に背振山系から派生する丘陵　通称・三国丘陵　があり、これが南へ行くに従い緩やかに下って平坦な台地へ移行し、市域南端で筑後平野へ連なっている。左岸は北東に所在する花立山　城山　を頂点として南へと下り、同じく筑後平野に至る台地が延びている。本書で報告する三沢南崎遺跡は、右岸の舌状に張り出す低位段丘の裾部に集落域が位置している。

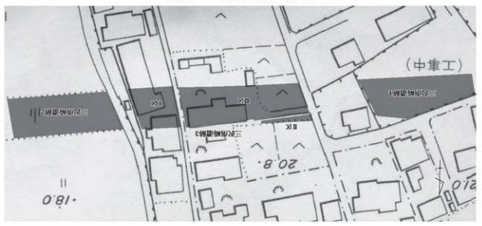
（２）歴史的環境

小都市三沢は、中九州ニュータウン開発計画に伴い、長期かつ大規模な発掘調査が実施された地域であり、特に弥生時代前期から古墳時代前期にかけての集落・生産域・墓域それぞれの全体像、集落間や集落対生産域、集落対墓域の相互関係を広域的な視野で見通すことが可能な、稀有な例である。ここでは本遺跡と同時期の遺跡について概観し、歴史的環境の概要を示す。

弥生時代前期は、湧水の伴う谷部の湿地帯と乾燥した丘陵部が接する位置に集落が経営される。三国丘陵においても、複雑に入り組んだ舌状段丘と小規模な谷部が面する位置に集落が集中する傾向がある。現・美鈴が丘、希みが丘には、前期から中期に掛けての環濠を伴う集落である三沢北中尾遺跡　　や一ノ口遺跡　　、北松尾口遺跡　　など、同時期の遺跡は枚挙にいとまがない。中でも一ノ口遺跡　　は、広大な丘陵という地形を利用した大規模な集落であり、外周する柵列によって防御された区画の中に、　軒を超える竪穴住居群が検出されている。弥生時代前期の生産域としては、木杭列を伴う谷水田を検出した三沢公家隈遺跡　　や水田畦畔が確認されている力武内畑遺跡　　がある。三沢公家隈遺跡は試掘調査に伴うプラント・オパール分析によって水田遺構の存在が推定され、本調査へ至った。畦畔・水路等は未検出であるが、溜め井状の役割を果たしたと想定される竪穴とそこから延びる蛇行する溝が確認されており、谷部の冷えた湧水を一旦この溜め井に入れ、温度調整をしたのち水田へ流し込む、という原始的な水利用の方法が提案されている。水田は小区画の階段状を呈していたと考えられ、木杭列は畦畔と溝を維持するための施設と思われる。力武内畑遺跡では、松菊里型住居を伴う集落域と共に、水田と水利施設である井堰が併せて検出された。井堰は当時の自然流路の水を水田へ引き込むための分水と調整の役割を担っており、複数回の補修の実施が確認されている。高度な灌漑技術が弥生時代前期の早い段階で内陸部まで伝播していたことが証明されただけでなく、集落と水田経営の双方が深く関連した資料として特筆に価する。また水田ではないが、三沢蓮ヶ浦遺跡　　では弥生時代前期の畑状遺構が確認されている。　　mの面積に畝と溝が構築されており、近接して居住域も見つかっている。この遺跡の調査成果からは、近接する他集落との位置関係から、当時の農耕集落の拡大してゆく状況や生業の主体、それに適した周辺環境の維持など、生産に関する様々な問題などが論じられている。これらからやや時代は新しいが、津古大林遺跡　7　でも弥生時代中期前半を始めとする、３時期の水田遺構が確認されている。出土遺物から推定される水田の上限は、８世紀・６世紀・弥生時代中期前半となり、最古の水田は畦畔で小規模に区画され、畦畔の補強のため沈下防止の板材を伴う杭列が構築されている様子が見られる。後期については、三沢蓮輪遺跡で大小の水路を伴う水田遺構が確認されており、その上流に位置する三沢上棚田遺跡　　では、これらの水田に水を供給する用途で構築されたと考えられる溝状遺構が検出されている。前述の力武内畑遺跡は本遺跡から南東に近接する位置にあり、「南北に長い舌状段丘に挟まれた谷部」という地理的条件は共通している。さらに、本遺跡の西にある段丘上には、同時期の遺構こそ未確認であるが、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての密度の高い集落が存在しており　三沢南崎遺跡３、平成　年度報告書刊行 、この集落を支えた生産域の存在を想定しなければならないだろう。

の広めのサブ川保取　　日１号自然流路の一部にサブトレンチを掘削。第１水田群作土と想定される面的に広がる黒色土との関係を確認するも直接の関係はない。１号自然流路　新段階　掘削開始　　日１号自然流路　新段階　の完掘　　日一平成　年１月６日正月休み　８日第１水田群作土を面的に全てほり、測図・写真撮影により記録。畦畔・溝状遺構の検出のため清掃を行うが認められず　９日第１水田群作土の除去開始　　日第１遺構面検出完了。　　区１回目の全景写真撮影。１回目の測量区全体図作成　　日１号自然流路　古段階　の掘削、木製品出土　　日第２水田群作土を調査しているため黒色土を面的に全て検出、測図・写真撮影により記録。２月１日第２水田群作土の掘削開始、２号自然流路の調査　　日第２遺構面　検出完了。８日　区２回目の全景写真撮影、２回目の測量区全体図作成　　一　日木製品の測図・写真撮影、取り上げ作業実施　　日　区東の原心作業開始。　　区表層土除去開始　　一　日　　日　区遺構検出開始、１・２・３号自然流路確認。１号自然流路　新段階　掘削開始　　日調査区内の層位確認　　区との間を掘削するためサブトレンチを掘削　　日サブトレンチ掘削完了、水田面の可能性があるのは第１水田群作土のみで１号自然流路　新・旧　との関連はないと判明、第１水田作土検出状況を写真撮影　　日　区１回目の全景写真撮影及び測量区全体図作成　３月６日１号自然流路　古段階　掘削開始　　日２号自然流路掘削開始、流れを変えて２時期に渡ると判明　　日　区２回目の全景写真撮影、樹材撤収　　日２回目の測量区全体図作成　　日　区東めの原心開始　　日東めの原心完了、小都市役所都市整備部道路整備課立会の下、現場引き渡しを行ない、調査完了





第２図　調査区位置図（S=1/2500）

序

九州のほぼ中央に位置する小都市は、自然豊かな田園都市として近年めざましい発展を遂げてきました。しかし、市内の各地には現在でも田畑が広がり、春に秋に実りの穂を垂れる姿が見られます。農業は今なお市の基幹産業の一翼を担い、私たちの日々の食卓を彩ってくれています。

今回ここに報告いたします三沢南崎遺跡の調査は、この田園風景の中で行なわれ、いにしえの農業に関わる貴重な資料が多数発見されました。過去も現在も、そしてこれからも、変わることなく私たちの生活と生命を支える「農業」という産業が、長い歴史の過程でどのように変化し、発展していったのか。それを知ることは、「食の安全」が大きく揺らいでいる現代社会において、未来の私たちの生活と生命を守ることにつながってゆくのではないでしょうか。

最後になりましたが、調査にあたりましては、地元三沢区のみなさま、福岡県久留米土木事務所に多大なご協力をたまわりました。記して感謝申し上げる次第です。

平成　年３月　日

小都市教育委員会
教育長　清武　輝

例　　言

1　本書は小都市三沢字南崎に所在する埋蔵文化財包蔵地　三沢南崎遺跡地内に計画された「都市計画道路本郷基山線　街路緊急地方道路整備事業」に伴う発掘調査報告書である。本調査は福岡県久留米土木事務所から委託を受け、小都市教育委員会文化財課が実施した。

調査参加者　敬称略、五十音順

岩原　春代　小野美代子　久家　富子　桑原美恵子　榊　文子　佐々木フサヱ　執行　弘子　品川リツ子
中原佐代子　野田美根子　野元エミ子　原野　照子　平川　晃敏　藤田ツヤ子　松本スマ子　柳　勝敏

以上小都市在住

2　本書に掲載した土層及び遺物出土状況図面は、調査担当者が作成した。製図は馬田妙子・熊本啓子が行なった。遺構配置図作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。
3　本書に掲載した個別遺構写真は調査担当者が撮影し、調査区全景写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
4　遺物の洗浄・復元には衛藤知嘉子・角野朋子・佐々木智子・田中悠美子・田鍋桂子・百嶋八千代の協力を得た。遺物実測・製図は調査担当者と馬田・熊本・柿本慈・久住愛子・吉田あや子が行なった。
5　遺物写真撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。
6　調査地土壌サンプルのプラント・オパール及び花粉分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
7　本書の執筆・編集は調査担当者が行なった。
8　本調査に関する出土遺物・図面・写真・カラースライド等については、全て小都市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　例

1　本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は世界測地系座標に拠っている。
2　本書で用いた標高は東京湾平均海水面　ＴＰ　を基準としている。

図 版 目 次

図版１　三沢南崎遺跡２　区第１遺構面全景　写真上方が北
　　三沢南崎遺跡２　区第１遺構面全景　写真上方が北
図版２　三沢南崎遺跡２　区第２遺構面全景　写真上方が北
　　三沢南崎遺跡２　区第２遺構面全景　写真上方が北
図版３　調査区上空から三国丘陵を臨む
　　調査区上空から三沢南崎遺跡３　集落部　を臨む
図版４　区１・２号溝状遺構　完掘状況　北から
　　区暗渠南壁面　土層断面　南西から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　１　北西から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　２　北西から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　３　北東から
　　区１号流路　第３段階　土器出土状況　南東から
　　区１号流路　第３・４段階　完掘状況　北東から
　　区４号溝状遺構　完掘状況　北から
図版５　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　１　北東から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　２　北西から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　３　西から
　　区１号流路　第３段階　木製品断割状況　１　西から
　　区１号流路　第３段階　木製品断割状況　２　西から
　　区１号流路　第３段階　木製品断割状況　３　北から
　　区１号流路　第３段階　木製品断割状況　４　西から
　　区１号流路　第３段階　木製品断割状況　５　北西から
図版６　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　４　北から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　５　北西から
　　区１号流路　第３段階　木製品出土状況　６　北から
　　区南壁面　土層断面　北東から
　　区２号流路　南壁土層断面　北から
　　区２号流路　完掘状況　北西から
　　区５号溝状遺構　完掘状況　北から
　　区調査風景
図版７　区１号流路　第４段階　完掘状況　南から
　　区１号流路　第３段階　完掘状況　南東から
　　区１号流路　第２段階　完掘状況　南から
　　区１号流路　第１段階　土層断面　南から
　　区１号流路　第１段階　完掘状況　南から
　　区２号流路　第１・２・３段階　土層断面　南から
　　区２号流路　第１・２・３段階　完掘状況　南東から
　　区２号流路　第４段階　完掘状況　北から
図版８　区６号溝状遺構　完掘状況　北西から
　　区３号流路　完掘状況　南西から
　　区３号流路　湧水状況　南西から
　　区３号流路　木杭検出状況　南西から
　　出土土器　１
図版９　出土土器　２
　　出土石器　１
　　出土石器　２
　　出土土製品・玉類
図版　出土木製品　１
図版　出土木製品　２
図版　出土木製品　３
図版　出土木製品　４
図版　三沢南崎遺跡２　プラント・オパール
　　三沢南崎遺跡２　花粉写真

Ⅰ．調査の経緯と経過

（１）調査の経緯

本遺跡の調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地三沢南崎遺跡地内　小都市三沢字南崎　　・　・　他　が「都市計画道路本郷基山線」街路緊急地方道路整備事業の対象地となり、久留米土木事務所より埋蔵文化財の有無に関する照会　　が提出されたことに始まる。これを受けて、小都市教育委員会文化財課で同年６月　日に対象地で試掘調査を行った結果、本田遺構の存在を伺わせる土壌変色が認められたことから、対象地の一部について開発に先立った調査が必要であるとの旨の回答を行った。その後、福岡県久留米土木事務所及び小都市都市整備部道路整備課との協議を行なった結果、小都市教育委員会が発掘調査の委託を受け、平成　年度事業として開発対象地を３遺跡　三沢南崎遺跡２・３・４　に分割して発掘調査を実施し、平成　年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

（２）調査の組織

本調査に関わる組織は以下の通りである。

＜平成　年度＞

【福岡県久留米土木事務所】　　【小都市役所都市整備部】　　【小都市教育委員会文化財課】
所　　長　植川　知彦　　部　　長　高木　良郎　　教　育　長　清武　輝
副所長　技術　吉岡　慶介　　道路整備課長　佐藤　吉生　　教　育　部　長　池田　清己
副所長　事務　清水　正信　　道路３係　係　長　丸山　義勝　　課　　長　田嶋千代太
都市施設整備課長　椎島　淳二　　小中　康一　係　　長　重松　正喜
調　　査　長　大深　徳浩　　東側　清隆　企　画　主　査　片岡　宏二
主任技師　福富　剛　　技　　師　杉本　岳史
上田　恵

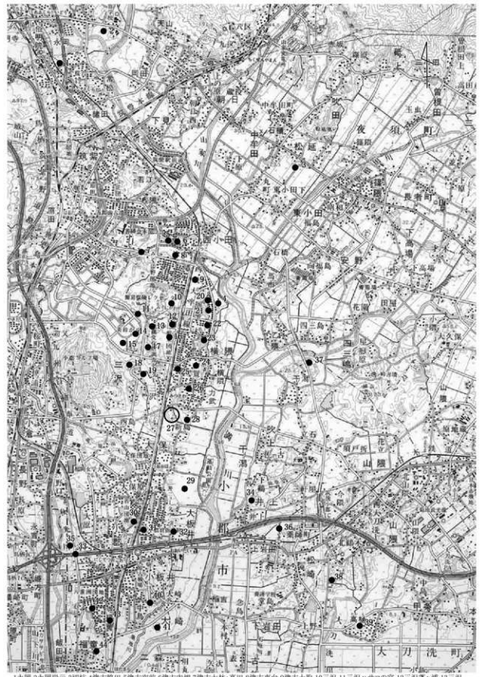
＜平成　年度＞

【福岡県久留米土木事務所】　　【小都市役所都市整備部】　　【小都市教育委員会文化財課】
所　　長　木原　宗道　　部　　長　池田　清己　　教　育　長　清武　輝
副所長　技術　古深　輝吉　　道路整備課長　佐藤　吉生　　教　育　部　長　赤川　芳春
副所長　事務　清水　正信　　道路３係　係　倉嶋　義和　　課　　長　田嶋千代太
都市施設整備課長　椎島　淳二　　津田　康博　係　　長　重松　正喜
調　　査　長　宮崎　洋三　　東側　清隆　企　画　主　査　片岡　宏二
主任技師　梶尾　眞司　　技　　師　上田　恵

（３）調査の経過

発掘調査は平成　年　月から平成　年３月　日にかけて実施した。調査区は現在の間伐上、南北に２分割し、南半部を　区、北半部を　区としている。試掘調査の成果から、調査区内には２面の本田遺構が存在する可能性が示唆されており、重機による水田耕作土直上までの表土除去を行い、それ以降の調査は人力によって実施することとした。以下調査日誌より抜粋した調査経過を記す。

平成　年　月　日重機による　区表層土除去開始　一　日　　日人力による遺構検出開始、自然流路１条確認　２時間、調査区内の層位確認のためテストピットを掘削、以後層位確認のため時々土層断面図の作成・写真撮影を実施　　日サブトレンチ・ボーリング及び花粉分析　　日プラント・オパール及び花粉分析を継続



第３図　周辺遺跡分布図（S=1/50000）

Ⅲ．遺構と遺物

（１）調査の概要

＜水田想定部分の調査＞

本遺跡の調査は、表土掘削及び遺構の手掘り掘削によって排出する廃土置場を確保するため、道路改良工事対象区を南北に分断し、南部を　区、北部を　区として実施した。調査の契機となった事前の試掘調査によって、２面の水田耕作面が存在する可能性が示唆されており、各水田耕作面の標高は比較的近接した数値を示していたため、まず重機によって既存田畑耕作土・造成土を除去し、第１遺構面を調査、その後手掘り掘削で第２遺構面を検出するという方法を採った。この方法は　・　区ともに共通する。

試掘調査によって確認された層序は、下記のとおりである。

第１層：黒灰色粘土
第２層：灰～青灰色粘土
第３層：黒色粘土
第４層：青灰～紫灰色粘土　基盤層

まず第１層　新段階水田耕作土　-第２層　新段階水田耕作面 、第３層　古段階水田耕作土　-第４層　古段階水田耕作面　と想定して調査を進めることとした。各層については、次の順序で調査を実施することとした。

水田耕作土を全面検出
精査によって水田畦畔・水路の有無の確認
耕作土の全面を段階的に掘削し、その都度精査を行なって水田畦畔・水路の有無を確認
耕作土を完全に掘削して耕作面を検出

出土遺物は各層の名称で取り上げ、遺構面の測図は水田耕作土検出状況及び水田耕作面の双方について行なうこととした。

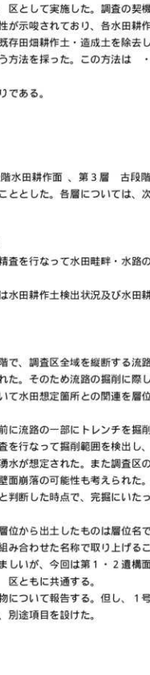
＜流路部分の調査＞

本遺跡内では、重機による表土掘削を実施した段階で、調査区全域を縦断する流路を検出している。この流路は検出段階から水田遺構との関連が想定された。そのため流路の掘削に際しては、機能していた時期の変遷を段階ごとに把握し、また各時期において水田想定箇所との関連を層位的に証明することが必要とされた。

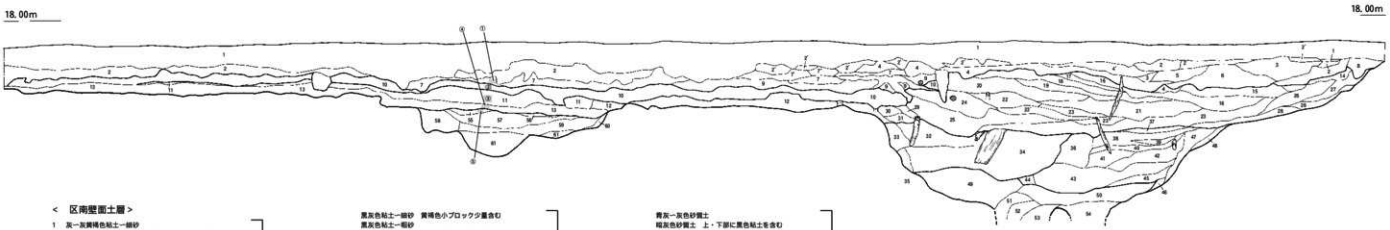
そこで、段階を追った掘削が可能となるよう、事前に流路の一部にトレンチを掘削し、流路の変遷を層位的に確認することとした。その上で遺構面の精査を行なって掘削範囲を検出し、流路埋土の掘削を実施している。但し、流路内は遺構の性質上激しい湧水が想定された。また調査区の基盤層下部は砂質土を基本とするため、掘削が進行するにしたがって壁面崩落の可能性も考えられた。よって、埋土掘削は作業が極めて困難となるか、あるいは危険を伴うと判断した時点で、完掘にいたっておらずとも中断することとした。

出土遺物は、事前に掘削したトレンチで確認した層位から出土したものは層位名で、異なる埋土から出土したものは流路の段階を示す番号と出土位置を組み合わせた名称で取り上げることとした。測図については、流路の全ての段階について行なうのが望ましいが、今回は第１・２遺構面と最も関連する段階での状況を計測することとした。この方法は　・　区ともに共通する。

以下、遺構面ごとに調査経過と検出遺構・出土遺物について報告する。但し、１号流路に関しては各遺構面との関連を踏まえて報告する必要があるため、別途項目を設けた。

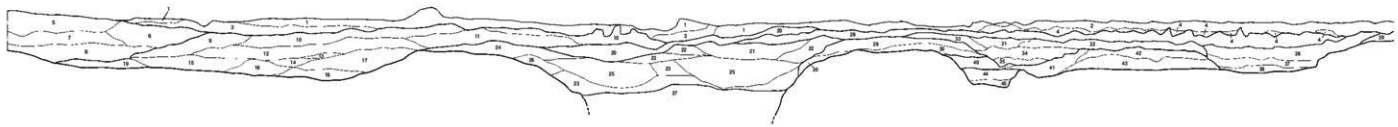


第６図　区画溝断面トレンチ土層断面（S=1/40）



< 区南壁面土層 >

1	灰一灰黄褐色粘土一細砂 鉄分含む、下部に黒褐色炭ブロック少量、細礫中量含む	覆土	黒灰色粘土一細砂　黄褐色小ブロック少量含む 黒灰色粘土一粗砂 黄褐色粘土小ブロック少量、橙色ブロック極微量に含む 灰色細砂一粗砂 黄褐色砂質土　橙色ブロック微量に含む 灰黄褐色粘土一細砂　黄灰色・黒色粒中量含む 灰黄褐色粘土一細砂　下部に黒色土・黄灰色粒微量に含む 灰色細砂一粗砂　黄褐色粘土ブロック下部に少量含む 灰色砂質土 粗砂、灰白色・橙色ブロック微量、木片多量に含む 灰色細砂一粗砂 黄灰色粘質土中量、灰白色・橙色ブロック中量含む 灰色砂質土 灰色粘土一粗砂　黄橙・白色ブロック少量、木片中量含む 黒灰一黒色粘土　木片少量含む 青灰一灰色粘土一砂質土　木片多量に含む 黒灰一黒色粘土 黒灰一黒色粘土　黄橙色粒少量含む 暗灰色砂質土　灰色粘砂多量に含む 暗灰色粘土 黒灰色粘質土　灰白色粘砂多量に含む 灰色粘土　粗砂中量、木片多量に含む 黒色粘土　しまり悪い 灰色粘質土　灰白色粘砂中量、木片・植物質多量に含む 黒灰色粘質土　灰白色砂質土中量含む	1号流路 第3段階 洪水土	青灰一灰色砂質土 暗灰色砂質土　上・下部に黒色粘土を含む 灰一灰白色砂質土　青灰色砂質土中量含む 黒色粘土　しまり悪い 暗灰色砂質土　灰白色砂質土中量、木片微量に含む 灰一灰白色砂質土　青灰色砂質土少量含む 灰色粘土一細砂　青灰色砂質土少量含む 黒灰色砂質土　灰白色細砂一粗砂中量含む 黒色粘土　しまり悪い 暗灰色粘土一細砂　青灰色砂質土微量に含む 黒色粘質土 灰黄褐色粘土 黒色粘土 灰白色粗砂 灰白色粗砂　灰色粘質土少量含む 黒色粘土　しまりやや悪い 黒灰色粘土　しまり悪い 黒色粘土　しまり悪い 灰黄褐色粘質土　黄褐色粘土ブロック中量含む 黒色粘土　しまり悪い 黒灰色粘質土　黒灰色粗砂少量含む 暗灰色細砂一粗砂　一部灰白色粗砂を含む 灰白色粗砂 黒灰色粘土　部分的に暗灰色粗砂を含む 黒灰色粘質土 灰白色細砂一粗砂　黒灰色細砂中量含む	洪水土 1号流路 第1段階 2号流路



< 区北壁面土層 >

1	黒灰色土　細礫少量含む	覆土	黒一黒灰色粘質土　橙色ブロック極微量に含む 灰白色粗砂　黒灰色土少量含む 灰白色粘質土　灰白色粗砂、木片多量に含む 灰白色粗砂　灰色粘土中量含む 黒灰色粘質土 灰色粗砂 灰色粘質土 黒灰色砂質土　橙色ブロック少量含む 灰色粗砂 灰色粘質土 灰色粗砂　下方はしまり良い 灰白色粗砂　しまり非常に悪い 黒色粘質土　しまり悪い 灰白一青灰色粗砂 青灰色砂質粘質土　鉄分少量含む 黒灰色砂質土	1号流路 第3　段階 洪水土 1号流路 第2段階 1号流路　第1段階 水田耕作面	黒灰色粗砂 暗灰色砂質粘質土　青灰色土少量含む 暗灰色砂質粘質土 灰色砂質粘質土 黒色粘土　しまり悪い 灰色粗砂 黒色粘土 暗灰一灰色粘土 灰白色粗砂 灰白色粘土と暗灰色土の混在 灰白色粗砂 暗灰色砂質粘質土 黒灰色粗砂 灰白一青灰色粗砂 暗灰色粘質土 灰白色粗砂
2	暗灰色粘質土　土器片、細礫多量に含む				2号流路 第3段階
3	暗灰色土				
4	黒灰色砂混粘質土　鉄分少量含む	水田耕作土			
5	黒一黒灰色土　灰一黄褐色ブロック、細礫中量含む				
6	灰色粘土　鉄分含む	1号流路 第4段階			2号流路 第2段階
7	黒色粘質土 灰白色粗砂、橙一黄褐色ブロック少量含む				
8	灰白一黄褐色粗砂　しまり悪い				
9	灰色砂混粘質土 暗灰色粘質土 黒色粘質土　しまり良い 灰色粘質土　灰白色粗砂、木片多量に含む 灰白色粗砂 灰白色粗砂　灰色粘土中量含む	1号流路 第3　段階			2号流路 第1段階

第７図　Ⅰ区調査区南壁・Ⅱ区調査区北壁土層断面（S=1/40）

肥前産。　は陶器の皿。灰黄色の素地に〈すんだ橙色の施釉〉内面は鉄の目跡剥を施すが、風化の痕跡を付き痕跡は見られない。外面の施釉は体部にとどまり、高台部分は露胎となっている。　　世紀の肥前産か。　は陶器の鉢。淡黄色の素地に赤褐色の施釉〈口縁内部に６条の刷毛目を施す。肥前産か。

（３）第２遺構面の遺構と遺物

＜Ⅰ区の遺構・遺物＞　第５図／図版２

第１層　水田耕作土　の盛削除去後は、第２層で石を検出作業の平面図・実測図を行なったのち、第２層　青灰色の質土　を手掘りで掘削し、第２遺構面の検出を行なった。第２層の検出範囲は非常に狭く、調査区中央部を行なった第５の幅で南北に縦断する状況を確認している。この検出状況の写真撮影、検出範囲の平板測量を行なった。段階を追って掘削することにたしかに、２段階目の掘削時に流れ状の掘りが込みとなっていた。その後は遺構面の発掘調査の手法に変更し、溝状遺構としての掘削を施し、完掘した。掘掘調査とけり土層観察で第３層　古段階水田耕作土　と認定された黒粘土層は、調査区を中央部を南北に縦断する流路の埋土であり、水田耕作土ではなかった。この縦断面をもとに、　区の調査においては初めより第３層は流路埋土と想定し、通常の遺構検出・掘削を行なうことにしている。

５号溝　第５図／図版６

調査区西端寄りに位置し、１号流路　第３段階　を切る。幅　　ｍ、深さ　　ｍを測り、断面は台形を呈する。幅は全体的に均一で、底面に目立つ凹凸は確認出来ない。ほぼ南北に流れ、南端は西側へ湾曲する。調査区北側に延長するが、　区では確認されていない。南端は１号流路と合流して消滅する。１号流路との関連は認められず、流路上部で一旦消滅するものと思われる。　埋土は黒色粘質土と暗灰色砂質土の層が堆積しており、水流を伴うものと考えられる。遺物は一切出土していない。

２号溝　第５図／図版６

調査区中央西寄りに位置し、南から北へ流れる。調査区南壁面及び暗渠南壁面の土層観察から、２時期以上の変遷があると考えられるが、調査段階では一括して掘削してしまっている。調査区内では逆Ｓ字型に蛇行しており、この形状は第１・２段階に共通する。

幅は全体で　　ｍ、深さは最大　　ｍを測る。第１段階　古　は断面がＵ字型を呈し、幅　前後、深さ　　ｍ前後を測る。第１段階の底面は段差や（ほぼ水平）を有しており、２段階目は最下層のみが残存していない。目の粗い灰色粗砂で遺構底面の青灰色砂混粘質土を層状になる面所も見られた。しまりは非常に良い。

第２段階　新　は断面長方形を幅　前後、深さ　　ｍ前後を測る。第２段階の遺構底面の状況は不明であるが、東壁中心に浅いＶ字状の段差があり、テラスとは不整形の凹凸が各所に見られる。また部分的にであるが、横方向へのえぐりなみも認められた。このえぐりなみは流曲する面所の最も外側に位置するところで特に顕著である。また、埋土は黒灰色～暗灰色粘土と砂質土が互層もくは同一層内とも埋積しているものと考えられる。

いずれの時期も動いのある水流を伴っていたと考えられる。遺構底面からは掘削遺中から少量の湧水がありり、降雨のない時期には流れがなくなるほどであった。

埋土の出土遺物については、　　ｍ前後の調査区内への流入を防止しなければならなかったことから、コンパネと丸太杭で仮設擁壁を設置している。

なお、基盤層検出段階から少量ではあるが湧水が認められたため、遺構の認められなかった調査区北壁沿いに排水路を掘削して、調査完了まで常時排水を行なった。

１号溝　第４図／図版４

基盤層で検出している。調査区西側に位置し、南から北に流れる。幅　ｍ、深さ　ｍを測り、断面は台形を呈する。上面の削平が激しく、残存状況は悪い。２号溝との先後関係は、検出状況からは確認出来なかった。　区への延長は認められないが、造成により削平されたと考えられる。

埋土からは、摩滅の激しい陶磁器・弥生土器の細片が出土している。近世以降の所産か。

２号溝　第４図／図版４

基盤層で検出している。調査区西側に位置し、北から南に流れる。幅　ｍ、深さ　ｍを測り、断面は長方形を呈する。上面の削平が激しく、１号溝との先後関係は判然としない。　区へは延長しないが、造成による削平のためと考えられる。上面が大幅に削平されているため暗渠排水路以南は残存しないが、１・２号溝ともに１号流路を切っている。

（２）第１遺構面の遺構と遺物

＜Ⅰ区の遺構と遺物＞　第４図／図版１

区の範囲内では試掘調査が実施されていないため、前述の層序を踏まえて重機掘削を行ない、第１層の全面検出を試みた。さらに調査区南壁沿いに層位確認用のトレンチを１本設定し、試掘調査で確認されている層位との整合性をおさえることとした。第１層は調査区の東側約　％しか残存しておらず、１号流路の西岸以降は黄色砂混粘土の基盤層を検出している。調査区の北半分は造成により削平され、耕作土・造成土の除去後は青灰色の基盤層のみが残存する状況であった。

但し、調査区南壁面においては、試掘調査と同様の層位が確認されている。対応関係は以下のとおりである。

第１層　第７図　　区南壁土層　層

第２層　同　　層

第３層　同　　～　層

第４層　紫灰色粘質土　基盤層

遺構面の標高は　　～　　ｍ前後であり、西から東へ向かって緩やかに傾斜している。平成　年度に実施した、同じ県道本郷基山線道路改良工事関連の調査によって、本遺跡は東に向かって落ち込む谷地形を呈すると想定されており、この調査でもそれを証明することとなった。

区第１遺構面では水田耕作と流路１条、溝２条を、水田耕作面　第２層　検出段階では溝２条、土坑１基を確認している。耕作土は２段階に分けて掘削・精査を行ない、水田畦畔の検出を試みたが、明瞭に畦畔と判断できる痕跡は認められなかった。耕作土内からは摩滅の激しい土器の細片の他、管玉１点が出土している。

流路については、水田耕作土との関連及び流路本体の時期差を把握するために３本のトレンチを設定し、掘削に先立って層位の把握を行なった。調査区中央に田畑用の暗渠排水路が設置されており、東・南の２方向で調査区外への延長が認められたため、隣接する農地への影響が懸念された。そこで暗渠の南北双方にベルトを残して調査期間中は維持を図り、流路調査用のトレンチ２本はこのベルトに沿って南北両方に設定した。しかし北側トレンチは湧水による下層の侵食が激しく、土層断面図作成前にベルト部分が崩壊したため、未記録となっている。この部分は、調査期間内は暗渠排水路を維持する必要性があったことと、隣接地で暗渠へ浸透した雨水の調査区内への流入を防止しなければならなかったことから、コンパネと丸太杭で仮設擁壁を設置している。

なお、基盤層検出段階から少量ではあるが湧水が認められたため、遺構の認められなかった調査区北壁沿いに排水路を掘削して、調査完了まで常時排水を行なった。

１号溝　第４図／図版４

基盤層で検出している。調査区西側に位置し、南から北に流れる。幅　ｍ、深さ　ｍを測り、断面は台形を呈する。上面の削平が激しく、残存状況は悪い。２号溝との先後関係は、検出状況からは確認出来なかった。　区への延長は認められないが、造成により削平されたと考えられる。

埋土からは、摩滅の激しい陶磁器・弥生土器の細片が出土している。近世以降の所産か。

２号溝　第４図／図版４

基盤層で検出している。調査区西側に位置し、北から南に流れる。幅　ｍ、深さ　ｍを測り、断面は長方形を呈する。上面の削平が激しく、１号溝との先後関係は判然としない。　区へは延長しないが、造成による削平のためと考えられる。上面が大幅に削平されているため暗渠排水路以南は残存しないが、１・２号溝ともに１号流路を切っている。

で、内面灰黄褐色、外面にぶい黄橙色、胎土には多量の砂粒を含む。前期末の所産。　は壺の底部か。外面にわずかにハケ状の痕跡を残す。胎土は精良でにぶい橙～黄橙色、焼成は良好だが外面に黒斑が認められる。　は甕の口縁～体部。第８図の西端に出土状況を掲載している。口縁部は外側に折れ曲がり、端部にキザミを施す。胴部には断面三角の貼付突帯を持ち、こちらにもキザミが見られる。口縁部内面から体部下方まで煤の付着が認められる。外面工具ナデ、内面指ナデ調整。胎土には砂粒を含み、焼成は良好、橙色。

これ以外に、調査区南壁面沿いでは木杭の打ち込みを、遺構の北東岸では木材の出土を面的に確認しており、後述するように多量の木杭・矢板が出土している。

第２段階の流路

南から北へ流れ、ほぼ直行する。底面幅は　ｍ前後、残存する深さは　ｍを測る。断面は台形を呈し、東西両岸に浅いテラスを持っていたと考えられる。流路底面はほぼ平坦で同レベルであり、流れのゆるやかな部分であったと思われる。

この時期の埋土は暗渠トレンチの土層断面では確認出来ていない。ここでは第２段階の流路埋土の上層に堆積している、東側からの流れ込み土のみが見られる。この流入に伴って埋土が削平されたとも考えられる。この段階の流路は水田耕作土に切られており、直接の関連はないと想定される。

埋土は灰～黒色粘質土を主体とし、砂質土層は認められない。特に最下層は有機物堆積土と見られ、よどみ状の部分であった可能性を示している。埋土から遺物の出土は認められない。

第１段階の流路

第１段階の流路は現地表から・　ｍの高さで検出しており、それまで掘削してきた上面流路の埋土はしまりの悪い粘質土と砂質土の互層である。また第１段階の掘削は、　区調査の最終段階に行なっており、遺構内部からの湧水や降雨・降雪による遺構及び調査区壁面の侵食も進行していた。この段階の流路掘削は、調査区壁面及び暗渠排水路脇のベルト崩壊の危険性があったため、埋土堆積の状況がある程度確認出来る部分までの掘り下げで断念しており、基盤層検出までは至っていない。なお、今回の調査で状況確認が出来た最古の段階であるため便宜上「第１段階」としている。調査区南壁面　層や暗渠トレンチ　～　層　４号流路と表現　といった、これ以前の同一流路と思われる埋土が若干ではあるが確認されていることから、この段階が初現ではないと考えている。

南から北へ流れ、調査区をほぼ真直ぐに縦断する。検出部分での幅　～　ｍ、断面は台形を呈すると見られる。埋土は灰白色粗砂を主体とし、湧水が波立つだけで侵食されるようなしまりの悪さであった。東西両岸に有機物堆積層である黒色粘土が見られることから、本来はよどみ状であったのが粗砂の大量流入に伴って埋没したものと考えられる。

出土遺物　第　図／図版８

埋土からは少量の弥生時代前期の土器が出土しているが、いずれも激しくローリングを受けている。

は高杯の頸部、断面三角の貼付突帯を持ち、杯部内面はミガキ調整、外面は工具ナデを施す。胎土には砂粒を含み、にぶい黄褐色、焼成は良好。　は壺の底部。内外面とも細かいミガキ、底部中央部にもミガキが及ぶ。胎土には砂粒を含み、にぶい黄褐色、焼成は良好。いずれも弥生時代前期前葉の所産。

＜Ⅱ区における検出状況＞　第５図／図版７

区でも　区と同様、西岸は基盤層で、東岸は第１遺構面で平面プランを検出している。ここには調査区北壁面の土層断面のみを掲載しているが、流路の流れる方向や形状については、調査区中央に設置したトレンチの土層の状況も踏まえて復元している。

流路の変遷については　区での調査成果にほぼ対応する結果が出ているが、流れの方向についてはや

＜Ⅱ区の遺構と遺物＞　第４図／図版１

区では試掘調査の結果を参考に重機掘削を行ない、第１層の全面検出を行なった。その上で、１号流路の段階を把握することを兼ねたトレンチを流路上から掘削し、流路埋土を含めた堆積土の層位の確認を実施している。第１層は　区よりも残存状況が悪く、１号流路の東岸から調査区中央部にかけてのみの検出となった。１号流路の西岸以降は黄色砂混粘土の基盤層を、また調査区東側では紫灰色粘土の基盤層を検出している。調査区の南半分は造成による削平が深くまで及んでおり、耕作土・造成土の除去後は青灰色のしまりの悪い基盤層が残存するのみであった。

但し、１号流路東岸部分では試掘調査の成果と同じ層位が確認されている。各層の対応関係は以下のとおりである。

第１層：黒灰色粘土　第７図　区北壁土層４層
第２層：灰～青灰色粘土　同　層
第３層：黒色粘土　同　～　層
第４層：青灰～紫灰色粘土　基盤層

遺構面の標高は　～　m前後であり、　区と同様に西から東へ向かって緩やかな傾斜を見せ、谷地形の存在を示している。

第１遺構面では水田耕作土と流路２条、溝１条を確認している。１号流路については、水田耕作土・水田耕作面との関連と、層位的に時期差を把握するため、調査区中央部の流路東岸から第１層の西端にかかる範囲に任意の位置で１本、調査区北壁沿いに１本、計２本のトレンチを設定し、埋土掘削に先立って機能している段階の確認作業を行なった。

なお、　区においても基盤層検出段階から少量ではあるが湧水が認められたため、遺構の認められなかった調査区南壁沿いに排水路を掘削し、調査完了まで常時排水を行なっている。

３号自然流路　第４図／図版８

調査区東半部に位置し、南西から北東方向に流れる。調査区東辺及び南辺へ延長するが、　区では確認されていない。　-　区間の壁面は表土崩落防止のために緩く傾斜をつけており、そのため調査区間に約　mの未調査区間が存在している。この流路は未調査部分を流れると思われる。流路の東寄りに廃土搬出用の通路と土層観察のためベルトを設置しており、この部分は未掘としている。

遺構の幅は位置によって異なるが　～　m、深さ　～　mを測り、断面は台形を呈する。南北両岸に幅　m、深さ　mのテラス状の段差を持つ。調査区南端でやや蛇行するものの、検出した範囲ではほぼ直行する。南西端は底面に段落ちや土坑状のくぼみを持つが、北東部分は平坦になっている。但し中央部には全体に細いくぼみを持っており、流水を伴う流路であったと考えられる。遺構底面からは激しい湧水が認められ、特に降雨の後は実際の河川のような状況となった。

埋土は灰色砂質土を主体とし、流路そのものの運搬堆積によるものと思われる。南側には打ち込みの杭列を確認しているが、不規則な並びで護岸等の役割を果たしたとは思われない。また、調査区全体図には図示していないが、この流路に流れ込むように設置された土管の埋設を確認している。流路とともに近世末～近代の所産と思われる。

出土遺物　第　図

埋土から少量の遺物が出土している。いずれも小片で激しくローリングを受けている。上流からの廃棄物及び堆積土からの混入と思われる。　は弥生土器の甕底部。外面はタテハケ、内面は指ナデ調整で指圧痕がかすかに残る。立ち上がりはさほど広がりを持たない。前期末の所産。　は陶器の皿。灰黄色の素地に黒褐色の施釉。内面は蛇の目釉剥を施すが重ね焼きの焼き付き痕跡は認められない。高台はケズリ出しで畳付けの釉薬は粗くケズリ取られている。　世紀代の肥前産か。　は染付の椀。高台及び見込み部分に２重の圏線が巡り、外面に植物文を施す。呉須はくすんだ藍色で発色は悪い。　世紀前半の

埋土からは陶磁器・弥生土器の細片が出土している。近世以降の所産か。

３号溝　第４図／図版１

１号流路の埋土上で検出している。調査区西側、１号流路の東岸に位置し、南北方向に流れる。幅　～　m、深さ　mを測り、断面は台形を呈する。北端は撹乱に削平されて消滅し、　区へは延長しない。遺構底面は平坦である。第１遺構面で検出し、この時期に機能していた１号流路　後述する第３段階　には切られている。但し、流路との境界部分が後世の洪水層に破壊されているため明瞭には見分けられないが、その前段階　後述する第２段階　の埋土の堆積状況からは、この流路に流れ込んでいたもしくは流路を切っていた可能性が高い。但し流れ込み部分及びそれに関連する施設等は確認されていない。また、第３層　水田耕作土　に切られるが、水田耕作面との層位関係から、これに伴う水路であった可能性が想定される。但し調査区内では、水田に繋がる水口状の施設及び痕跡を検出することは出来なかった。

埋土からは微量の土器片が出土しているが、細片で摩滅が激しく、時期の特定は出来ない。

４号溝　第４図／図版４

第２層上面で検出している。調査区中央西寄りに位置し、北から南に流れる。幅　～　m、深さ　mを測り、断面は長方形を呈する。後世の造成による削平のため、北端は途切れており、　区へも延長しない。検出状況からは、１号流路との関連性は見出せない。溝の形状は激しく蛇行しており、底面には凹凸が目立つ。埋土はしまりの悪い黒色粘質土で、掘削時も水分を多く含んでいた。流水を伴う水路か。水田遺構に伴う溝とも想定されるが、これと一連となるような施設は確認出来ていない。

埋土からの遺物の出土は認められない。

１号土坑　第４図／図版１

第２層上面で検出している。調査区中央部に位置し、南半分を撹乱に切られる。検出面からの深さは　mを測り、直径　m程度の円形を呈すると考えられる。埋土は黒色粘質土の単層である。

遺物の出土は皆無であった。

水田遺構

第１層とした黒灰色粘土を検出、精査したのち、写真撮影と水田畦畔・水路の有無の確認を行なっている。水田想定部分の調査開始段階には、黒灰色粘土は調査区中央から１号流路の東岸までの、極めて狭い範囲にのみ広がる状況であると判断していた。この黒灰色粘土は北端では残存地形の傾斜に沿って徐々に薄くなる傾向が見られ、調査区北端では黒灰色粘土の堆積は認められず、青灰～紫灰色の基盤層が露出していた。

第１層と判断した部分を精査した結果、まず１号流路東岸に南北方向の畦状に青灰色粘土の存在が認められたため、これを畦と想定して第１層の段階的な掘削を実施した。しかしこの畦状の痕跡は互層の範囲を示すもので、水田区画の畦と判断出来るほどの土質の差異は認められなかった。第１層は２回に分けて面的な掘削を行い、その都度表面を精査したが、畦畔・溝等の痕跡は認められなかった。検出状況からはこの堆積層を水田と判断するにはいたらなかった。

当初第１層が分布すると判断した範囲の掘削後、第２層で検出した溝との関連を確認するためトレント及び調査区南壁面の再精査を実施している。その結果、第１層の範囲は調査区東端まで延長すること、調査区中央より東については第２・３層の分布がなく、基盤層直上に第１層が堆積していることが明らかとなった。

＜Ⅱ区の遺構・遺物＞　第５図／図版２

区においても、　区同様に第１層である水田耕作土の検出後、平板測量で検出範囲・標高を測図し、２段階の手掘り掘削を行なっている。但し第１遺構面の記録を取ったのちは、通常の遺構検出を実施し、２号流路の平面プランを確認、掘削している。　区第２遺構面で検出された遺構はこの２号流路のみで、その他の溝・土坑等は認められなかった。

２号流路　第５図／図版７

調査区中央及び西寄りに位置し、調査区内を縦断する。検出及び掘削後に観察した土層の状況から３段階の時期差があると判断した。このうち第１　最古・２　古　段階については　区の土層で確認した段階とそれぞれ対応するが、第３段階　新　については　区の記録からは対応関係を判断することが出来なかった。第２段階と同じ流れとなるか、これより東寄りの流路を取っていたものが削平されているか、いずれかは不明である。

第３段階の幅は　～　m、深さ　m前後を測り、断面はU字形を呈する。南東　北西方向に流れ、緩いS字型を示す。流路の両岸にはテラス状の不整形な段差がつく他、遺構保護のため完掘していないが、横方向のえぐり込みが見られた。底面にも段差、ピット状のくぼみ等、激しい凹凸が認められる。遺構の底面そのものも、青灰色砂混粘質土と青灰色粗砂の互層となっており、完掘の判断に迷うような状況であった。埋土はしまりの悪い暗灰色粘土を主体としている。

第２段階の幅は　～　m、深さ　m前後を測り、断面は長方形を呈する。南北方向に流れ、調査区をほぼ真直ぐに縦断する。東西両岸に幅　m、高さ　m程度のテラス状の痕跡が見られる。遺構の床面は平坦で、目立った凹凸は認められない。埋土は黒色粘土と灰白色粗砂の互層となっている。

第１段階の幅は　～　m、深さ　mを測り、断面は台形を呈する。南北方向に流れるが、北端は西へ湾曲する。調査区北壁面の土層からは流路の変更が認められるが、１段階の差異と判断した。西岸に幅　m、深さ　mのテラス状痕跡を確認している。第２段階の流路に削平されているが、東岸にも同様の痕跡があった可能性がある。埋土は黒灰色～暗灰色粘土と灰白色粗砂の互層となっている。

第１・３段階は勢いのある水流を伴い、第２段階は比較的流れの緩やかな部分であったと考えられる。遺構底面からは掘削開始段階から少量の湧水が認められ、特に北端で顕著であった。

出土遺物　第　図

埋土からの遺物は認められない。第３段階の流路の最上層から土器片が１点出土しているが、上面からの混入品と考えられる。

（４）１号流路

＜Ⅰ区における検出状況＞　第４図／図版４・５・６

区では、西岸は基盤層で、東岸は第１層上面で平面プランを検出している。なお、調査区南壁面及び暗渠南壁面の土層観察から、遺構検出面より上層で機能していた流路が認められた。これらは調査区の覆土として、本格的な発掘調査開始以前に重機による掘削を行なっている。調査区西側には現在でも用水路があり、田畑への給排水及び道路部分の雨水処理に使用されている。この水路は明治期の地籍図においても所在が確認されていることから、上面で機械掘削を行なった流路はこの水路である可能性も考えられる。

また、この流路を掘削する前に設定・掘削した暗渠排水脇のトレンチ及び調査区南壁の土層観察から、検出面より古い時期の流路として４段階の変遷を確認している。これを根拠として、流路の掘削は各段階の埋土を掘削して、変遷を追いながら調査を行なった。但し、段階が異なっても埋土の土色・土質が類似することが多く、堆積状況の確認が困難な調査区中央部の掘り方については、必ずしも旧況を示すものではないということをここにお断りしておく。また、変遷と前項で報告した他遺構・水田耕作土、流路の埋没契機と考えられる洪水土等は、全て土層観察からの想定である。それぞれの流路の段階の埋土及びその対応関係は下記のとおりとなる。第２段階の埋土については、暗渠トレンチの土層観察では確認出来ず、調査区南壁のみの検出となっている。

【流路の段階】	【暗渠トレンチ対応層位】	【調査区南壁対応層位】
第４段階	第６図１～６層	第７図３～６層
第３段階	７～　層	～　層
第３段階	～　層	
第２段階		～　層
第１段階	～　層	～　層

流路では、掘削開始時から段階を問わず湧水が見られ、遺構底面となる砂混粘質土の埋土と混じってヘドロ状の状況であった。掘削時にはポンプを設置して常時排水を行なっていたが、降雨の翌日は排水を上回る量の水が湧き出し、河川状になる様子が見られた。

第４段階の流路

第４段階の流路は上面を重機掘削で削平しているため、詳細な規模は不明であるが、南から北へ流れ、東側へ緩く湾曲する。底面幅は　m以上で、比較的大規模であったと考えられる。

埋土には黄褐色地山ブロックを多く含み、しまりも良い。運搬堆積による埋没ではなく、人為的な埋め戻しも想定される。

出土遺物　第　図／図版８・９

混入品と思われる弥生土器・石器類の他、土師皿・擂鉢の出土が見られる。１は土師器の小皿。胎土は精良で浅黄橙色、焼成は良好、底面は回転糸切りで中央部が盛り上がるタイプのもの。４は土師皿で底面回転糸切り、胎土は精良でにぶい黄橙色、若干焼成不良である。いずれも近世の所産。３は土師器の杯。底部回転糸切り、灰黄褐色の精良な胎土で焼成は良好。中世の所産。２は陶器の擂鉢。胎土は精良で暗赤灰色、底面は回転糸切り、内面に６条１組の擂目があり、　世紀代の肥前産と思われる。５は黒色緻密質安山岩の打製石鏃、完形。長　cm、幅　cm、厚　cm、重量　g これは図示を控えた弥生土器細片と同様、混入品と思われる。これらの出土遺物から、この段階の流路は近世までは機能していたと思われる。その他、微量ではあるが植物種子も出土している。

第３段階の流路

第３段階の流路は南から北へ流れ、調査区をほぼ直行する。底面幅は　～　m、残存する深さは　m前後で、暗渠より北は断面台形、調査区南端では東西両岸に浅いテラスを持っていたと思われる。暗渠部分は川幅が狭く、勢いのある水流を伴っていたか、底面は下層の堆積と交差する部分が見られる。

埋土は黒灰～暗灰色粘質土と暗灰～灰色砂質土の互層となっており、運搬堆積による埋没が考えられる。埋土内には木片が見られたが、いずれも自然木で明確に木製品と確認出来るものはなく、現地で処分をしている。木質は流路東岸寄りの堆積層に集中しており、西岸寄りにはほとんど見られない。

なお、この流路は第１遺構面で検出した第１層　水田耕作土　を切って流れており、水田遺構との直接の関連はない。暗渠トレンチの土層からは流路の変更が認められるが、同時期の小規模な変化と判断した。この変更は調査区南壁では確認出来ない。

出土遺物　第　図／図版８

埋土からは少量の弥生土器・石器類が出土しているが、いずれも摩滅が激しく混入品と見られる。９・　は甕の底部。９は摩滅のため調整不明であるが、厚い底部を持ち、体部接合のための指圧痕を外面に残す。焼成良好、胎土は精良でにぶい黄橙色。　は外面工具ナデ、内面指ナデ調整を施す。焼成は良好

〜　としておく。この杭列に加え、西端に少量の自然木が点在する部分を併せて、５つのブロックとして捉えられよう。

西端に位置する５点はいずれも自然木で、加工痕跡は一切認められない。流路の進行方向と向きが一致しており、第３段階の底面と検出レベルが一致することから、流路が機能していた時期の流れ込みによるものと考えられる。

列　〜　は流路の進行方向と一致した並びとなっている。列　は南壁面から　ｍまでの位置に並び、木杭　本と矢板１枚で構成されている。杭の残存長は　ｃｍ前後で、打ち込みの深さはほぼ一定の範囲であさまっている。横に寝た状態で検出している杭・自然木もあるが、打ち込みが確認されている杭と一連の遺構を構成するものではなく、杭は抜けて流れに乗って移動したもの、自然木は流入して杭列にからまったような状態である。打ち込まれている杭も密度は低く、水量調節が可能な構造ではない。

列　は南壁面から１ｍ前後の範囲に並び、杭　本と矢板２枚で構成されている。杭の残存長は　〜　ｃｍと幅があり、打ち込みの深さも第２段階検出面直上までのものから、列　より深い部分まで及ぶものまでさまざまである。横方向で検出している杭・自然木も多いが、いずれも打ち込み杭・矢板との直接的な関連はなく、杭列の隙間にからまった状況に過ぎない。打ち込みの列は東西にぶれがあり、列　よりは密度が高いものの、隙間部分も多い。水を堰き止めるような施設とは考えられない。

列　は南壁面から１ｍ弱の位置で検出されており、杭　本と矢板４枚で構成されている。杭の残存長は　ｃｍ前後で、打ち込みの深さはほぼ均一である。横に寝た状態で検出された杭・自然木は、列　・　と同様に流路の流れに乗ってからまったと思われるものと、流路第２段階上面に流れ込んだ洪水層に含まれて流入したと考えられるものとが混在している。いずれにしても、打ち込み杭とともに施設を構成するものではない。

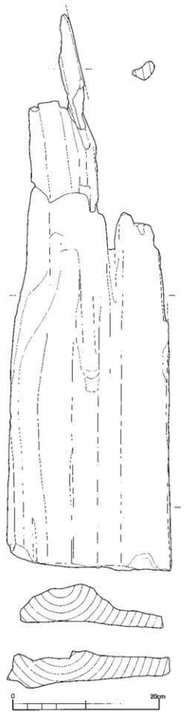
列　は他の杭列とは軸が異なり、流路の進行方向とは一致しない。残存長　ｃｍ前後の６本のみで構成され、流路第３段階の東岸沿いに打ち込まれている。打ち込みの深さは浅く、岸辺の傾斜部分に設置されていたものと考えられる。杭の密度は低いが、この列は位置から護岸的な役割を果たしていた可能性も想定される。

出土遺物　第　〜　図／図版　・

持ち帰った杭・矢板のうち、残存状況が良好なもののみを掲載している。

第　図１は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、先端は一方向からの複数回のケズリによって扁平な片刃状に加工されている。打ち込みによる若干の破損が見られる。外面の加工は行なっておらず、樹皮の残存が部分的に認められる。　は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、外面は未加工で全面に樹皮を残している。先端は一方向からの複数回のケズリで扁平な片刃状に調整している。打ち込みによる破損が顕著に認められる。３は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、外面は樹皮が残る未加工の状態で、枝落しのみを行なっている。先端は８方向からのケズリによってとがった状態になっており、打ち込みによる破損が見られる。４は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、外面は樹皮を除去しているが、ケズリ調整は認められない。先端は１方向からのケズリで扁平な片刃状に加工している。５は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、下方に樹皮が残ることから、自然木の先端のみを加工して使用したと思われる。先端は１面からのみのケズリで扁平な片刃状を呈する。６は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、先端は複数方向から丁寧にケズリを施し、とがらせている。打ち込みによる破損は全く認められない。中間で湾曲するが、打ち込みによる変形ではなく、原木の形状である。外面には部分的に樹皮が残存し、枝落しのみを行なっている。

第　図１は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、外面に樹皮が残る、枝落しのみを行なうタイプのもの。先端は斜めに切ることで片刃状の体裁を採っており、ケズリは認められない。打ち込みによる破損が見られる。２は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、外面に



第16図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品⑦（S=1/4）

（５）その他の出土遺物　第　・　・　図

本遺跡においては、これまで報告してきた遺構に伴う遺物のほか、堆積土内からも少量ではあるが遺物が出土している。ここではそれらの概要をまとめて報告する。

＜Ⅰ区水田耕作土の出土遺物＞　第　図

６の碧玉製管玉は調査区北東隅から出土し、径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、下方が欠損。７は甕の底部。内面工具ナデ、外面は摩滅により調整不明。胎土は精良でにぶい黄橙色、焼成は良好。

＜Ⅰ区水田耕作面の出土遺物＞　第　図

８の甕の口縁部１点のみの出土。口縁部が屈曲して外反し、キザミを持つ。胎土には砂粒を含み、にぶい黄橙色で焼成は良好。

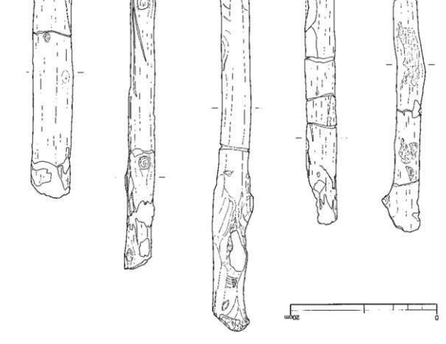
＜Ⅰ区洪水土の出土遺物＞　第　図

１号流路第２段階の上面を覆う洪水土からの出土遺物。　・　は甕の口縁部。いずれも端部にキザミ、　は口縁部が緩やかに外反し、　は屈曲する。　は胎土に砂粒を含み、にぶい褐色。焼成は良好で外面に煤が付着している。　は精良な胎土でにぶい褐色、焼成は良好。　・　は甕の底部。

は外面工具ナデ、内面指押ナデ。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。浅黄橙色だが二次焼成による変色が見られる。　は胎土に粗砂を含み、焼成は良好、にぶい黄橙色で一部黒斑が認められる。

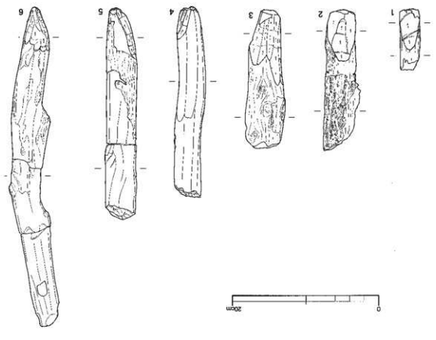
＜Ⅱ区洪水土の出土遺物＞　第　図

１号流路第２段階の上面を覆う洪水土からの出土遺物。　は甕口縁。端部にキザミを持ち、内外面ハケ調整。胎土に砂粒を含み、灰褐色、焼成は良好。　は甕底部。全面指ナデで胎土は精良、にぶい黄褐色、焼成は良好。　は甕口縁。端部は直立し体部にキザミのある突帯を持つ。内外面ハケ調整。胎土には砂粒を多く含み、にぶい黄橙色。焼成は良好。　は壷口縁。内外面ともヨコミガキ。胎土には砂粒を含み、にぶい黄橙色、焼成は良好。９は土製勾玉。浅黄橙色で胎土は精良。全面ナデ調整で後ろから穿孔。



第12図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品③（S=1/4）

３は列　を構成する「かんな刃」の打ち込み杭。最大幅　ｃｍ、残存長　ｃｍ、厚　ｃｍ、３面に加工痕が残り、木取りの方向で加工意図が三角形の形状を作り出している。先端にケズリ調節はなく、木取りの段階で形状を整えたようである。４は列　の中央に位置する「かんな刃」の打ち込み杭。幅　ｃｍ、残存長　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。外周は樹皮が残るが、木取りのみを行なっており未加工状態である。５は列　の中央に位置する「かんな刃」の打ち込み杭。幅　ｃｍ、残存長　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。上下端が欠損しており、残存状況は不明。２は列　を構成する「かんな刃」の打ち込み杭。幅　ｃｍ、残存長　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。６は列　を構成する「かんな刃」の打ち込み杭。幅　ｃｍ、残存長　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。先端は樹皮面がケズリ調整されており、打ち込みによる破損が認められる。

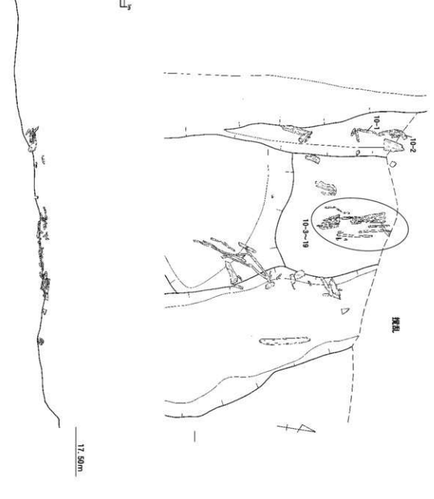


第11図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品②（S=1/4）

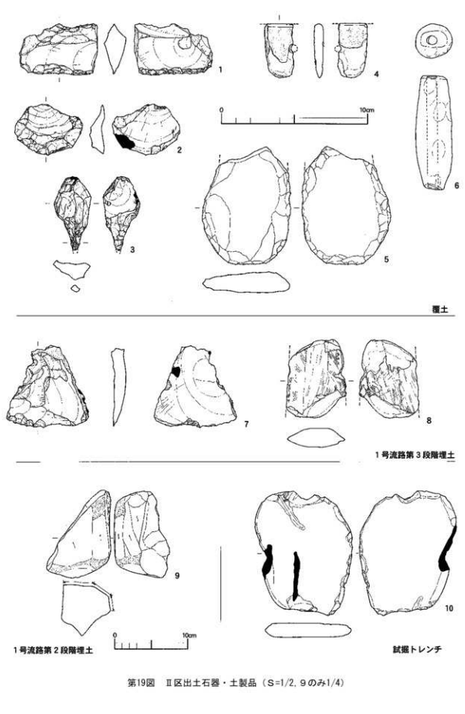
他は保存されないが、母体のみを行なっている。３は列　を構成する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、表面は樹皮の残存しているが、先端は樹皮面からケズリ調整を施している。原部に打ち込みによる破損が多く見られる。４は列　を構成する打ち込み丸木杭。計　ｃｍ、長さ　ｃｍ、先端は樹皮が残っており、樹皮は保存されていない。　は保存されていない。先端はケズリによって扁平な片刃状に加工している。５は列　の北端に位置する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、先端は樹皮面からケズリによって扁平な片刃状を呈する。６は列　の北端に位置する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、先端は樹皮面からケズリによって扁平な片刃状を呈する。打ち込みによる若干の破損が見られる。５は列　の北端に位置する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、先端は樹皮面からケズリによって扁平な片刃状を呈する。打ち込みによる破損が見られる。６は列　の北端に位置する打ち込み丸木杭。径　ｃｍ、残存長　ｃｍ、先端は樹皮面からケズリによって扁平な片刃状を呈する。打ち込みによる破損が見られる。

第13図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品⑥（S=1/4）

の左寄りに持ち手状の部分が付随する。持ち手の先端は壁面に深くくり込んでおり、遺物取り上げ時に壁面崩壊を行なったと思われ、調査区東端の危険性があったためと考えられる。未来はこれらもを、くさるものである。　は部分幅　ｃｍ、板部分厚　ｃｍ、持ち手部分残存長　ｃｍ、持ち手部分径　ｃｍ前後を測る。　は部分は４面の加工を行なっているが、側縁を加工痕が残されない。各面は基本的に平滑で、下端に破損等は認められず、他の矢板と比較チ厚薄なる。持ち手部分は、板部分の中央から盛り上がりをもって延びており、全体は１枚盛り上がっている。但し盛り上がり部分の先端は薄く なるようである。用途は不明。



第８図　Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況①（S=1/20）



第19図　Ⅱ区出土石器・土製品（S=1/2, ９のみ1/4）

や異なる状況も認められる。遺構からの湧水についても　区同様で、掘削中に湧水と崩落により一部遺構が破損する事態も発生している。

各段階の埋土の対応関係は下記のとおりであり、流路の段階については　区と共通する。

【流路の段階】	【調査区北壁対応土層】
第４段階	第７図５〜７層
第３段階	〜　層
第３段階	〜　層
第２段階	〜　層
第１段階	層

第４段階の流路

上部堆積層の一部を重機掘削で削平してしまっており、詳細な規模は不明である。残存部から、南から北へ流れ、調査区を斜めに直行する。底面幅は　ｍ前後を測り、断面は台形を呈する。

埋土は粘土や粗砂を含まない非常にしまりが良い土で、人為的な埋め戻しが考えられる。

出土遺物　第　図／図版９

少量の土器片・石器類が出土しているが、いずれも混入品である。１・２は黒色緻密質安山岩のスクレイパー。１は幅　ｃｍ、長さ　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。２は幅　ｃｍ、長さ　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。３は黒色緻密質安山岩の石鏃。先端部が欠損しているが古い段階の破損。残存長　ｃｍ、幅　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。４は頁岩質砂岩の磨製石庖丁。穿孔部分周辺の一部のみ残存。残存長　ｃｍ、残存幅　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ。６は土製錘。胎土は精良、焼成は良好で暗灰色。全面ナデ調整で指頭痕跡が残る。

第３段階の流路

第３段階の流路は南から北へ流れ、調査区を斜めに直行する。底面幅は　期で　ｍ前後、残存する深さは　ｍを測る。断面は　・　ともに台形を呈し、遺構底面はほぼ平坦となる。　期は東西両岸とも黄褐色砂混粘質土の基盤層であったと思われる。

埋土は暗灰〜黒色粘土と灰色粗砂の互層となっており、運搬堆積による埋没が考えられる。埋土内には木片を多く含む層があり、特に東岸沿いに集中している。なお、　区で確認した水田耕作土との先後関係は、　区は土層及び平面プランでは確認出来ない位置関係にある。遺構底面での河川施設等は、　区では検出されていない。

出土遺物　第　・　図／図版９

埋土から極少量の遺物が出土しているが、いずれも小片でローリングを受けている。第　図２は土師器の杯身。内外面はヨコナデ調整、胎土は精良でにぶい黄橙色。３は土製丸玉、淡黄褐色の精良な粘土を使用。第　図７は黒色緻密質安山岩のスクレイパー。幅　ｃｍ、長さ　ｃｍ、厚　ｃｍ、重量　ｇ完形品。８は頁岩製の磨製石剣。刃部が不明瞭なほど後世の摩滅が激しい。

１片のみであるが古墳時代後期の土師器が見られることから、この段階の流路の埋没は、最も早くて古墳時代後期前葉と想定される。

第２段階の流路

第２段階の流路は南から北へ流れ、東にふくらみを持って湾曲する。底面幅は　ｍ前後、残存する深さは　ｍを測り、断面は台形を呈する。東西両岸が浅いテラス状になっていたと思われる。遺構底面はほぼ平坦で、流れはあるが比較的緩やかであったと考えられる。埋土の残存状況は不良だが、暗灰〜黒色粘土と灰白色粗砂の互層となっており、しまりは非常に悪い。

出土遺物　第　・　図／図版８・９

埋土から少量の土器・石器・石製品が出土しているが、いずれも激しいローリングを受けている。第　図４・５は甕の口縁～体部、口縁部は折り返して成形し、内外面ともヨコミガキ調整を施す。胎土は精良で、にぶい橙色、焼成は良好。６は鉢の底部、外面調整は摩滅のため不明だが、内面は指ナデ。胎土には砂粒を多く含み、にぶい黄褐色、焼成は良好。弥生時代前期後葉の所産。８は鉢、外面は磨耗調整のため調整不明、内面は工具ナデを施す。底部に黒斑が認められる。胎土には砂粒を含み、灰白色で焼成はやや軟質である。前期末から中期初頭の所産。７は用途不明の土製品。淡黄褐色で胎土は精良、焼成はやや軟質である。上下面に平坦面を持つ扁型で、土製紡錘車の未成品とも考えられる。第　図９は砂岩の砥石。砥面が激しく２面の使用面を確認している。

遺物の時期から、この段階の流路は早くとも弥生時代前期末には埋没したと想定される。

第１段階の流路

第１段階の流路は東へ流路しながら、南から北へ流れる。検出面の幅は　m前後で、断面は台形を呈すると思われる。東西両岸とも、黄褐色砂質土基盤層となる。埋土は最上層の灰白色粗砂のみを確認している。区に表されていては、遺構底面からの湧水が非常に激しく、現時作業中に埋土である灰白色粗砂と茶褐色層下部の黄灰色粗砂の判別を行なうことが難かで困難であったことから、最上層のみの検出に留めている。区で見られた黒色粘土は認められず、この段階以前の流路の存在を示す土層も確認出来ていない。

出土遺物　第　図

埋土から後期後葉の遺物が出土している。，　と鉢の底部。　は外面にミガキ状の痕跡が見られる。にぶい橙色で焼成は良好。胎土には砂粒を含む。　は内面工具ナデ。外面調整は摩滅により不明。胎土には砂粒を含み、にぶい黄褐色、焼成は良好。弥生時代前期前葉の所産。

出土遺物から、第１段階の流路は弥生時代前期前葉に埋没したと考えられる。

＜木材の検出状況＞　第８・９図／図版４・５・６

区１号流路の第３段階の北東岸及び南西底面から、まとまった量の木材が出土している。多くは人為的な加工痕が認められない自然木であったが、中には木取品と判断出来るものも含まれていた。遺物の取捨選択は現地での取り上げ作業時に行なわ。自然木と判断したものは現地分としている。２箇所の検出場所から計　点を持ち帰っているが、大半は杭で同一の形状を示すものが多いことから、低湿の巻台上残存状況の良好なもののみを測図、掲載している。

１号流路北東の出土状況　第８図／図版４

１号流路東岸に位置し、３号遺構土層から１号流路東岸テラス部分にかけての　m四方の範囲に分布している。第３段階　の埋土内から出土しているが、遺物の出土状況を流れと直接関連する様子ではない。出土範囲を遺物の長さと並びに準じて大まかに東・中央・西の３ブロックに分けて詳細を記す。東ブロックは南北方向に広がりを持ち、全て加工痕跡の認められない自然木であった。検出レベルは均一で、この段階での遺構面　いわゆる地山　に貼り付くような状況となっている。並びは北東　南西方向で、流路の進行方向とは一致しない。

中央ブロックは南北方向に並列する樹木の根あがりとみられる。樹木はいずれも径　cm程度の枝を半分に割ったもので、全て割れ面を上にして平行に並べて出土している。高さは一定でやや遺構面から浮いた状態である。元々は　cm程度のものが８列もしくはそれ以上並んでいたと思われるが、埋土層削平に中央に南寄りの部分を破壊してしまっている。流路の方向とは同じ向きとなっている。西ブロックは板状の自然木は遺構面にめり込むような状態で出土している。

西ブロックは板状の自然木と小枝、２点の木製品が確認されている。自然木の多くは樹皮部分を主体とする薄手のものだが、木質部分に加工痕は認められず、自然倒壊によるものと判断した。遺物は遺構面から若干浮き上がった状態で検出しており、流路の進行方向と同じ向きに並ぶ。

出土状況からは、流路岸上ということもあり、廃棄場とは考えがたい。１号流路第３段階の遺構面は第２段階の上面を覆う洪水堆積であり、これの流入に伴って流れ込んだとも考えられる。

出土遺物　第　図／図版　・

点を木製品として持ち帰っているが、いずれも扁型(推示的図録)であり、用途は不明である。１は西ブロック北東りで検出した棒状木製品。「みかん割」にした材の表面を粗く削り、上部の左右に１カ所ずつ三角形の刺り込みを入れている。下部は破損しており、全体の形状は不明である。残存長　cm、幅　cm、厚　cm。２は西ブロック北端で検出した板状木製品。柱目に取った板材の表面を削っているが、使用による摩滅のため加工単位は不明である。隅部に棒状に摩滅が顕著な範囲が見られる。また使用に由来すると思われる棒方向のけずれが認められる。残存幅　cm、残存長　cm、厚　cm。

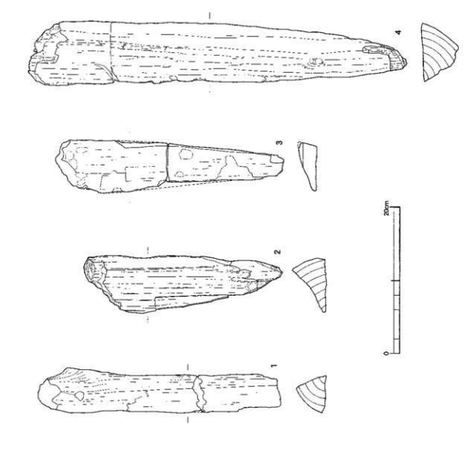
３～　は中央ブロックで検出した樹木の枝とまじりある。全て未整するのは、枝を半割もしくは「みかん割」にして使用していること、外面は樹皮を残す未加工の状態であること、目立った使用痕が認められないことの３点である。以下、それぞれの法量を記してく。３は幅　cm、長さ　cm、上端から４cmの位置に穿孔跡と思われる刺り込みが見られる。４は幅　cm、長さ　cm、枝払いが不十分。５は幅　cm、長さ　cm、上端に穿孔跡と思われる刺り込みがある。６は幅　cm、残存長　cm、破損の残部。７は破損の残部で幅　cm、残存長　cm。８は破損の残部で幅　cm、残存長　cm。９は幅　cm、残存長　cm、長さ　cm、下端から　cmの位置に穿孔跡と思われる刺り込みが見られる。は幅　cm、残存長　cm、先端が細目するものをそのまま使用している。は破損の残部で幅　cm、長さ　cm、は幅　cm、長さ　cm、上端から６cmと　cmの間所に３mm四方の方形の穿孔を施している。穴は中央より左に寄る。は幅　cm、残存長　cm、上端から３cmと９cmの位置に方形穿孔の痕跡が見られる。この部分で建物が破損していることから、穿孔のスキさは不明。断面三角形となっている。先端はこの刺りによって鋭くなっており、特別に加工されている訳ではない。幅　cm、残存長　cm、は幅　cm、残存長　cm、下端から　cmの部分に３mm四方の穿孔が見られる。は幅　cm、長さ　cm、下端が湾曲しているものをそのまま使用している。上端から　cmの位置に３mm四方の穿孔が認められる。は幅　cm、残存長　cm、下端から　cmと　cmの、中央より左寄りの位置に４mm四方の方形穿孔が確認されている。は相削段階で破損した物の一部。幅　cm、残存長　cm、上端は方形穿孔の痕跡の可能性がある。

３～　は全体で１つの製品を構成しており、それぞれ２箇所以上の穴をあけ、そこに組状のものを通して繋がれていたようである。

１号流路南端の出土状況　第９図／図版５・６

調査区南端に位置し、一部が調査区外へと延長している。流路の底面に点々と頂部が認められる程度の検出状況であったため、のちに第２段階の流路掘削と平行して遺物出土状況の記録と遺物取り上げを実施した。東寄りを中心に、南北　東西　mの範囲で木材と木製の打ち込み杭が見られた状況を確認している。流路の平面図は、第３段階の埋土を掘削し、それと同時に第３・２段階間に存在する洪水堆積土も除去したのちに測図しており、第３段階の遺構底面から　cm掘り下げた状況を示している。ここで検出する杭列については、杭の頂部が並ぶ部分が打ち込み面となり、それより下方が打ち込んだ深さとなる。

打ち込みはいずれも南北方向の列となっており、４列を構成している。ここでは便宜上西から順に列

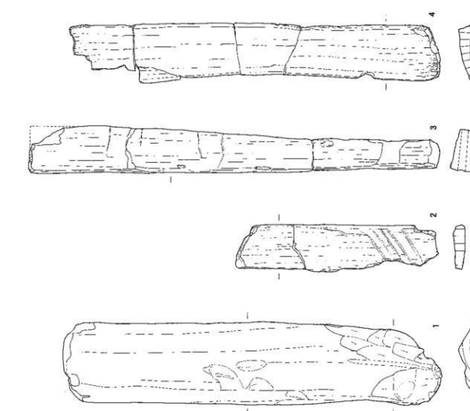


第10図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品①（S=1/4）

第13図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品②（S=1/4）

第　図１は列　中央に位置する「みかん割」の打ち込み杭。幅　cm、残存長　cm、厚　cm。外面には１面のみケズリによる平坦面が見られる。先端は片側からケズリを入れて厚みを減らしており、打ち込みによる破損が見られる。２は列　・　間の北端に位置する打ち込みの矢板。幅　cm、残存長　cm、厚　cm。下端は取り上げ時に破損しており、詳細は不明である。頂部は原形を留め、打ち込み痕跡と思われる破損が見られる。は列　を構成する打ち込みの矢板。幅　cm、残存長　cm、厚　cm。４面を加工している。先端は欠損していたため詳細は不明。頂部に打ち込みによる破損が見られる。３は列　を構成する打ち込みの矢板。構方向では上にしているが、列　の打ち込み杭とは間違しない。幅　cm、長さ　cm、厚　cm。やや外湾して変形している。下端は打ち込みによる破損が認められる。別の位置で打ち込み使用されていたものか、洪水により流されたか。

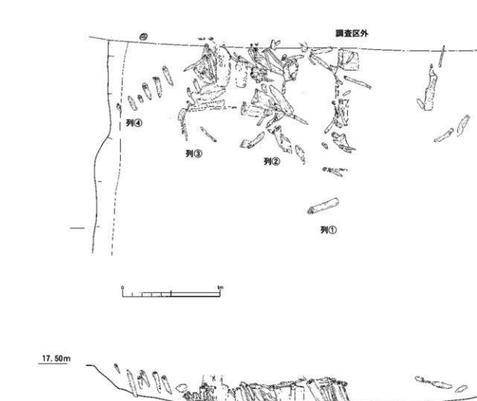
第　図１は列　・　間に北へ面を向けて打ち込まれている矢板。幅　cm、残存長　cm、厚　cm。断面は三角形だが、形状と大きさから矢板として扱った。工具により上から下へ削った痕跡が中央部に僅かに認められる。下端は打ち込みに伴う破損が見られる。は列　の北端に位置する打ち込み矢板。



第14図　Ⅰ区１号流路（第３段階）出土木製品③（S=1/4）

幅　cm、残存長　cm、厚　cm。断面は三角形を呈する。上部は大きく破損し、下部は打ち込みによる変形が認められる。３は列　を構成する打ち込みの矢板。幅　cm、残存長　cm、厚　cm。４面を加工しており、先端には打ち込みによる破損が認められる。下部に斜め方向のケズリ状の痕跡が見られるが、使用に伴うものか。

第　図は列　の南端に位置し、一部が調査区外へと延長する。当初は矢板と想定していたが、調査区南端部に入り込んでいる部分は棒状の形態となっていたため、取り上げ段階で木製品と判断した。頂部



第９図　Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況②（S=1/30）

第15図　Ⅰ区出土土器（S=1/4）・石器（S=1/2）

る状況で川岸を検出しており、またこの流路が姿を現す時期を明瞭に判断出来る資料は出土していないためである。第1 - 2段階のように大幅に進路を変更していなかった可能性もあるが、推測にとどまる。この水田については、耕作土上面に薄く灰〜青灰色砂質土の堆積が認められることから、流路と同様に洪水層の堆積を受けて廃絶したと考えられる。ここで問題となるのが水田経営の時期である。水田耕作土からは極微量の弥生時代前期末の土器片が出土している。しかしこれらはいずれも細片で摩滅が激しく、後世の混入品である可能性も高い。隣接する集落の住人が生産基盤として水田経営を行なった、と夢想することも出来るが、この他には時期決定の根拠となり得る遺構・遺物が存在していないため、ここでは弥生時代中期以降、1号流路　第3段階　の埋没する古墳時代後期以前、と広い時期を提示するにとどめ、今後の周辺調査の成果を待ちたい。

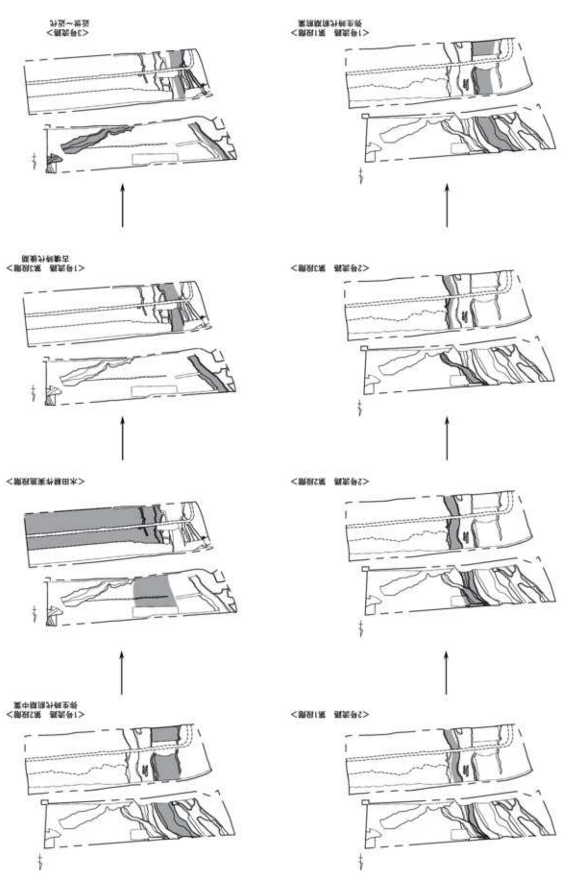
さて、調査区東側に経営された水田の廃絶後、1号流路　第3段階　はこれまでより強く西へ蛇行する形で新たに姿を現す。川幅は狭くなり、水流の勢いも前段階よりは衰えたのか、有機物堆積土が目立ち、埋土内にも木片や種子・落葉類が含まれるようになる。この段階で、調査区南端の東岸寄りに木杭・矢板を直接打ち込む施設が設置される。

章でも述べたとおり、杭列は流路の進行方向と平行に設置されており、水の流れを妨げるものではない。また、杭・矢板ともに遺構底面に隙間を空けて打ち込まれているだけで、これらを繋ぐヨコ方向の材は認められない。南東に近接する力武内畑遺跡7では、自然流路の水位を調整し、隣接する水田へと水を導入するための井堰及びその関連施設が確認されているが、これとは全く形状が異なっている。また、東岸に近接するとはいえ、この段階の流路は調査区をほぼ斜めに直行する状況で、護岸に関する施設とも思われない。小郡川原田遺跡　では流路内に設置された護岸設備状の杭列が確認されているが、これは河川が蛇行して湾曲する、最も水の負荷がかかる位置に設置されており、本遺跡の状況とは異なる。杭・矢板の上部は大きく破損しており、土層では観察出来ない洪水の存在とそれによる破壊も想定されるが、南から北へ流れるこの流路内で、調査区北側にはほとんど木質・木材が認められていない状況があることから、大幅な損壊は受けていないと思われる。

このような構造から、杭列は流路の水位・水流調整を目的とした施設ではないと考えられる。可能性として挙げられるのは、流路の水を溜池的に利用するための補助施設であろう。他市町の調査事例では、人為的に掘り込んだ湧水土坑や、流路脇に掘削もしくは区画して構築した水溜め場を、植物の灰汁抜きや木材の保存に使用する例が散見される。これを小規模な流路本体を利用して行なったとも想像出来る。但し北九州市長野小西田遺跡のように、今回の調査区以南に別の流路あるいは水路が存在し、そこからの取水や分岐を促す施設の可能性も想定される。詳細な用途検討は、やはり周辺調査の進展に伴う資料の増加を待たねばならないだろう。

1号流路　第3段階　は緩やかな流れを維持しながら、運搬堆積による土砂で埋没する。埋没の時期は、出土土器から早くとも古墳時代後期と考えられる。

その後、1号流路のながれを汲むと思われる流路は近世のものが確認されるのみである。非常に長い空白期間があるが、この間には水田経営の安定化を図るために不可欠であった治水技術の向上や新技術の伝播、国家による水田区画の変更、開墾の奨励など、大まかな経過説明ではあるが、自然と農業に関わる大きな変化が見られた時期でもある。その中でこの地域の環境と土地利用がいかに変化し、自然をも変えていったのかは、周辺の歴史的様相も含めた復元が必要であるだろう。近世から近代にかけて、おそらく治水のために使用されたと思われる1号流路　第4段階以降　・3号流路は、明治期の地籍図に該当すると思われる水路として掲載されている。そして平成元年の当地域の圃場整備事業を経て、現代の水路へと繋がっていくのである。



第22図　流路変遷案（S=1/600）

Ⅳ. 三沢南崎遺跡２における自然科学分析

株式会社古環境研究所

（1）分析資料の採取について

本遺跡は、遺跡の所在が確認された試掘調査の段階から、水田遺構が存在する可能性が想定されていた。しかし、水田畦畔や区画溝が良好な状況で検出される例は稀であり、検出作業そのものについても充分な知識と経験を要する。そこで遺構として明瞭に確認されずとも、水田遺構が存在していた可能性を検証するため、水田耕作土及び耕作面と想定される土壌のプラント・オパール分析を行なうこととした。これと同時に、本遺跡の西側には非常に密度の高い集落遺跡　三沢南崎遺跡3、平成　年度報告書刊行　が所在することから、集落周辺を含めてこの地域の環境と植生を明らかにし、水田耕作が実施可能な環境であったのかを検証するため、花粉分析も併せて実施した。

土壌サンプルは調査を開始し、トレンチ掘削によって基本層序が確認出来た段階で採取した。試料1〜5は株式会社古環境研究所分析担当者が、6〜　は調査担当者が採取した。それぞれの土壌サンプルの採取土層と試料番号は第6・7図に示している。なお北壁については、上部の造成土層が厚く、堆積状況が明瞭に観察出来ない状況であったため図示していないが、現地調査において暗渠南壁土層に見られる層位と対応関係を確認し、同一層と確定した位置に採取場所を反映させている。各土壌は下記のように位置づけている。

試料1：第7図　南壁7層　水田耕作土覆土
試料2：第7図　南壁　層　水田耕作土
試料3：第7図　南壁　層　水田耕作面
試料4：第7図　南壁　層　2号流路埋没後堆積層　水田耕作面形成以前
試料5：第7図　南壁　層　2号流路埋土最上層
試料6：第6図　　層　北壁と対応　　2号流路埋土最上層
試料7：第6図　　層　北壁と対応　　2号流路埋土上層
試料8：第6図　　層　北壁と対応　　2号流路埋土中層
試料9：第6図　　層　洪水土　下層
試料　：第6図　　層　洪水土　中層
試料　：第6図　　層　洪水土　最上層

（2）プラント・オパール分析

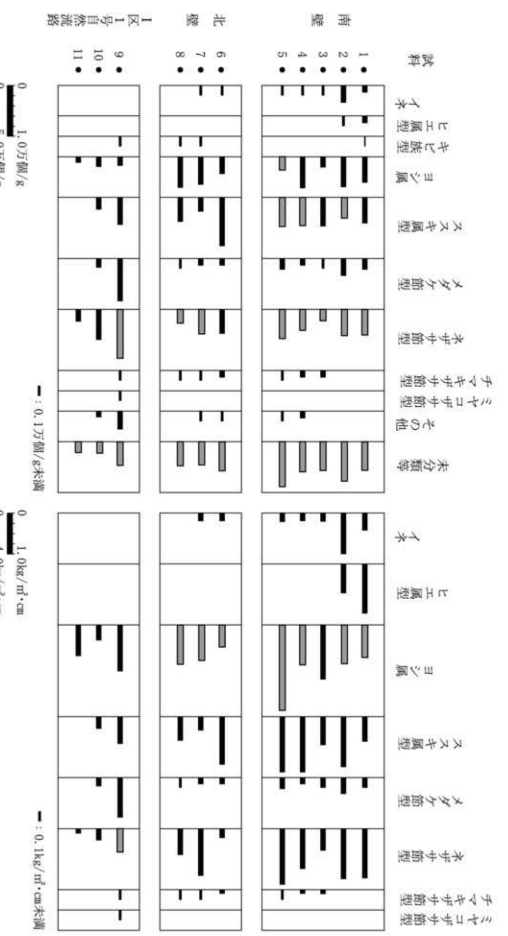
1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸　SiO_2　が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石　プラント・オパール　となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている　杉山　　　。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である　藤原・杉山　　　。

ここでは、三沢南崎遺跡2における稲作の可能性と周辺植生について、プラント・オパール分析から検討を行った。

2．試料

分析試料は、　区南壁の暗灰色粘質土　試料1　、暗灰色粘質土　試料2　、青灰色粘質土　試料3　、



第20図　三沢南崎遺跡2のプラント・オパール分析結果

2　北壁　試料6〜8

イネは試料6と試料7で、キビ族型は試料7と試料8で検出それぞれ検出されたがいずれも低い密度である。ヨシ属はすべての試料で高い密度で検出された。ススキ属型もすべての試料で検出された。試料6と試料8では高い密度である。メダケ節型とチマキザサ節型はすべての試料で検出されたが、いずれも低い密度である。ネザサ節型もすべての試料で検出された。試料7と試料8では非常に高い密度である。

3　　区1号流路暗渠南壁　試料9〜

キビ族型は試料9のみで検出されたが低い密度である。ヨシ属はすべての試料で検出されたがいずれも低い密度である。ススキ属型は試料9と試料　で検出された。試料9では高い密度である。メダケ節型は試料9と試料　で検出され、試料9では高い密度である。ネザサ節型はすべての試料で検出された。試料9では非常に高い密度である。チマキザサ節型とミヤコザサ節型は試料9のみで検出されたがどちらも低い密度である。イネは検出されなかった。

5．考察

南壁の試料1〜試料5、北壁の試料6と試料7の各層準でイネが検出されている。稲作跡の可能性を判断する際の目安は、試料1gあたりイネ機動細胞プラント・オパールが　　個の密度で検出された場合とされている　藤原ほか、　　。ただし、その後の各地の調査において、イネのプラント・オパールが　　個 g前後の密度でも水田遺構が検出された事例が多数報告されている。試料2ではプラント・オパール密度が　　個 gと比較的高い値である。さらに直上層よりも高い密度であり、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性は考えにくい。こうしたことから、試料2　5層　では調査地において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準ではプラント・オパール密度が低いことから、ここで稲作が営まれていたことを積極的に肯定することはできない。もし稲作が行われていたならば、耕作地は調査地の周辺であったと思われる。なお、試料1と試料2でヒエ属型が検出されているが、これらは水田雑草のタイヌビエであった可能性が高い。

1号流路暗渠南壁の各試料からはイネは検出されていないため、この流路周辺で稲作が行われていた可能性については言及できない。

その他の分類群では、各層ともヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型がそれぞれ高い密度ないし非常に高い密度で検出されている。乾燥した環境の指標となるススキ属型やネザサ節型が多いことから、各層堆積時の調査地は比較的乾いた環境であったと推定される。とくに　区1号流路の試料9の時期はより乾いた状態であったとみられる。一方、湿地の環境の指標となるヨシ属も高密度で認められることから、調査地周辺の低いところにはヨシの繁茂する湿地が広がっていたと推定される。なお、耕作土と推定される試料2でもヨシ属が高密度で検出されていることから、あるいは堆肥としてヨシの葉が田面に鋤込まれた可能性も考えられる。

6．まとめ

三沢南崎遺跡2においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性と周辺環境について検討を行った。その結果、南壁の試料2　5層　において調査地で稲作が行われていた可能性が認められた。調査地周辺は比較的乾いた環境であり、周辺の低いところには湿地が広がっていたと推定された。

4．結果

1　分類群

出現した分類群は、樹木花粉　、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉　、シダ植物胞子2形態の計　である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉数が　個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第　図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した　図版　。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉

モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属 - アサダ、クリ、シイ属 - マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ、エノキ属 - ムクノキ、モチノキ属、カエデ属、ムクロジ属、ブドウ属、グミ属、モクセイ科

樹木花粉と草本花粉を含むもの

クワ科 - イラクサ科、マメ科、ニワトコ属 - ガマズミ属

草本花粉

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科 - ヒユ科、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

シダ植物胞子

単条溝胞子、三条溝胞子

2　花粉群集の特徴

　区南壁土層　試料1、試料3、試料4　において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。第　図

1　試料1

樹木花粉と草本花粉の占める割合は同程度で、約　%を占める。樹木花粉ではシイ属 - マテバシイ属を主に、クリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などが出現する。草本花粉ではヨモギ属が優占し、イネ科、キク亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科、タンポポ亜科などが伴われる。

2　試料4

樹木花粉の占める割合が高くなり、約　%を占めるようになる。樹木花粉のシイ属 - マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属の増加で特徴付けられ、シイ属 - マテバシイ属、クリは集塊も認められる。

3　試料3

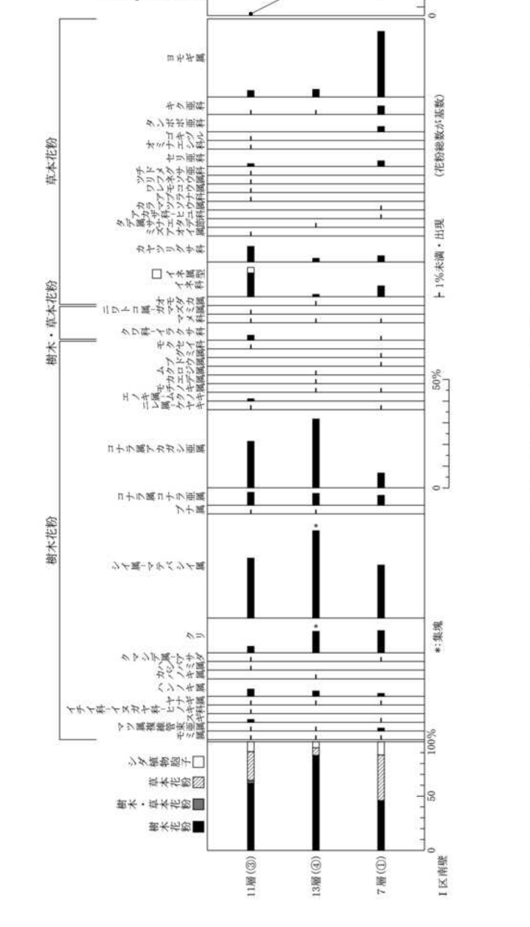
樹木花粉の占める割合が約　%になる。草本花粉ではイネ科にイネ属型が伴われるようになり、カヤツリグサ科、セリ亜科、ヨモギ属、ミズアオイ属などが出現する。樹木花粉ではシイ属 - マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が優占する。

5．花粉分析から推定される植生と環境

　区南壁土層において、下位より花粉群集の特徴から植生の復元を行う。

1　試料1の時期

近隣にシイ属 - マテバシイ属を主要構成要素とする照葉樹林が分布し、クリ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などもその構成要素であった。堆積地周辺にはヨモギ属を主に、イネ科、キク亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科、タンポポ亜科などの草本が生育し、やや湿ったないしやや乾燥した環境であった。



第21図　三沢南崎遺跡2における花粉ダイアグラム

文　献
杉山真二　　タケ亜科植物の機動細胞珪酸体　富士竹林植物園報告　第　号　p
杉山真二　　植物珪酸体　プラント・オパール　考古学と植物学　同成社　p
杉山真二・松田隆二・藤原宏志　　植物細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用・古代農耕技術のための基礎資料として・　考古学と自然科学　　p
藤原宏志　　プラント・オパール分析法の基礎的研究　・数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法・　考古学と自然科学　9　p
藤原宏志・杉山真二　　プラント・オパール分析法の基礎的研究　・プラント・オパール分析による水田址の検索・　考古学と自然科学　　p

(3) 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象にした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の復元にも試みられている。花粉などの遺物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、　区南壁土層から採取された試料１，試料３，試料４の３点である。これらは、プラント・オパール分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村　　の方法をもとに、以下の手順で行った。

1　試料から１ｃｍを採量
2　　％リン酸ヨードリウム　水　溶液を加え、分離濃縮
3　水洗処理の後、　mmの篩で篩などの大きな砂子を取り除き、次薬法で砂粒を除去
4　　％フッ化水素酸溶液を加えて　分離濃
5　水洗処理の後、水酸化によって脱水し、アセトリシス処理　無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎　を施す
6　再び水酢酸を加えて水洗処理
7　次薬に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
8　検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって、　～　倍で行った。花粉の同定は、鳥倉をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の順位で示し、複数の分類群にまたがるものはハイフン　・　で結んで示す。イネ属については、中村　　を参考にして、現生標本の顕微鏡・大きさ・孔・表面所面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とする。また、この処理を施すとケスノキ科の花粉は検出されない。

2. 試料４の時期

シイ属・マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主要とする照葉樹林が優勢となり、周辺は開ける。

3. 試料３の時期

下位同様に近隣の森林は照葉樹林であるが、イネ属型を含むイネ科がやや多くなり、水田稲作のミズアオイ属も出現することから、周囲で水田の分布が示唆される。

6. まとめ

区南壁土層において花粉分析を行った。試料１，試料３，試料４の３層準とも、樹木花粉ではシイ属・マテバシイ属とコナラ属アカガシ亜属が優占し、周辺にはシイ林やカシ林の照葉樹林が分布していた。下位の試料１の時期は、堆積地点に近い湿地に生育するミズアオイ属を含むイネ科がやや乾燥した環境であった。試料４の時期になると照葉樹林が優勢となり、開けた。上位の試料３の時期は、イネ属型を含むイネ科がやや多くなり、周囲での水田の分布が示唆された。

参考文献
金原正明　　花粉分析法による古環境復原　新版古代の日本新　総古代資料研究の方法　角川書店　p
島倉巳三郎　　日本植物の花粉形態　大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集　p
中村純　　花粉分析　古今書院　p　とくにイネ Oryza sativa を中心として 第四紀研究　p
中村純　　イネ科花粉について、とくにイネ Oryza sativa を中心として 第四紀研究　p
中村純　　稲作とイネ花粉　考古学と自然科学　第　号　p
中村純　　日本産花粉の種類　大阪自然科博物館収蔵目録第　集　p

表１　三沢角崎遺跡２における花粉分析結果

花粉	分類群	1区南壁 7層	10層	11層	13層
Arboreal pollen	樹木花粉				
Abies	モミ属	1	2	2	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	5	4	4	4
Cryptomeria japonica	スギ	1	1	1	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	1	1	1
Alnus	ハンノキ属	5	10	1	1
Betula	カバノキ属			1	1
Carpinus	クマシデ属			1	1
Corylus	ハシバミ属	1	2	1	2
Castanopsis-*Quercus japonica*	シイ属－マテバシイ属	39	93	84	196 *
Castanea crenata	クリ	2	9	16 *	9
Castanopsis-*Pasania*	シイ属－コナラ亜属	17	16	49	141
Fagus	ブナ属	1	1	1	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属アカガシ亜属	36	49	14	25
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属イチイガシ亜属	2	2	1	3
Ulmus-*Zelkowa serrata*	ニレ属－ケヤキ				
Celtis-*Aphanantheaspera*	エノキ属－ムクノキ	1	1	1	2
Alnus	ハンノキ属				
Salix	ヤナギ属				
Sapindus	ムクロジ属				
Tilia	シナノキ属	1	1	1	1
Elaeagnus	グミ属				
Diospyros	柿属－ヤマガキ属			1	1
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木花粉－草本花粉				
Moraceae-*Urticaceae*	クワ科－イラクサ科	3	1	2	2
Leguminosae	マメ科	1	1	1	1
Sanguisorba-*Thalictrum*	他にワレモコウ属－カラマツ属				
Nonarboreal pollen	草本花粉（ツル植物を含む）				
Saururaceae	ドクダミ科				
Gramineae	イネ科	19	33	1	5
Oryza type	イネ属型		8		6
Cyperaceae	スゲ科	11	22	8	8
Persicaria sect. *Persicaria*	タデ属ヤナギタデ節		2	2	2
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属ハルタデ節				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科				
Fraxinus	トネリコ属	2	1		
Plantago	オオバコ属				
Compositae	キク科				
Sonchus-*Ixeris*	ノゲシ属－ホソバワダチソウ属	1	2		
Artemisia	ヨモギ属				
Ambrosia	ブタクサ属				
Xanthium	オナモミ属				
Umbelliferae	セリ科				
Ranunculus	キンポウゲ属				
Fern spore	シダ植物胞子	115	9	2	16
Monolate type spore	単条型胞子	10	18	8	19
Trilete type spore	三条型胞子		12	2	8
Arboreal pollen	樹木花粉	149	170	159	293
Nonarboreal pollen	草本花粉	182	88	33	43
Total pollen	花粉総数	331	258	192	336
Pollen frequencies of Item	試料1cm³当り花粉密度	2.2	2.0	304	403
		×10³	×10³	×10³	×10³
Unknown pollen	未同定花粉	14	14	10	27
Fern spore	シダ植物胞子	52	30	27	37
Digestion remnants	消化残渣	(+)	(+)	(+)	(+)
Helminth eggs	寄生虫卵	(+)	(+)	(+)	(+)
Charcoal fragments	炭化物破片	(+)	(+)	(+)	(+)

＊：多い

V. 調査成果のまとめと検討

本遺跡で検出された遺構と出土遺物を体系する遺状遺構と土器１類で取り、遺構密度は比較的低い。また遺物の性格上、遺物の出土も少量である。ここでは主に出土遺物の変遷を概観しといし。

調査区内で検出した自然流路は全３条で、３号流路は１時期であるが、１・２号流路はそれぞれ複数の流運を経ている。調査区南面の土層観察より、各流路の変遷と調査区中央部で検出した水田耕作土との関連が捉えられる。その過程を示したのが第　図である。

調査によって確認出来た最も古い段階は、２号流路　第１段階　が調査区中央を縦断していた。この流れは比較的緩やかで流路の蛇行も少ない。その後２号流路は自身の運動作用で流れを変え、次の段階に至る　第２段階　・２号流路　第３段階　はそれまでとはそれぞれ大きく　・　区間で大きく蛇行する。この変化については、土層観察からは読み取れないものの、流路作用だけではない外部からの影響を伴っていると可能性もある。やがて２号流路　第３段階　は遺構埋積により更新する。２号流路が埋積していた時期はさだかではないが、１号流路に先行することと、出土遺物に縄文期の石器が含まれることから、この時期と想定しても良いだろう。この時期は水田耕作の可能性は皆無であり、近接して湿地帯が広がっていたようである。調査区東側の谷部がこれに相当すると思われる。

２号流路の埋没後、１号流路　第１段階以前　の流れが調査区西寄りに登場する。当初小規模だった流路は、１号流路　第１段階　に大量を増やし、川幅を広げたと思われる。この流路は遺跡の西側に位置する段丘ガシバンは低くなり、川底に運び込まれる土砂の量を増加する。この時期は遺構埋積土内から出土した土器から、弥生時代前期前葉と想定される。流路に近接した湿地帯は、この段階にも残っていたようである。

遺構埋積によって埋没した１号流路　第１段階　は、同時に自身の水流で新たな流れを作り出していく、ここで１号流路　第２段階　が現れる。遺跡に大幅な変差はないが、川幅や蛇行箇所に若干の変化が認められる。１号流路　第２段階　は遺構埋積による埋没が進行すると同時に、西側から多量の洪水土の流入を受けて埋没に至る。現在でも調査区の南側には口開川が東西に流れ、調査区東側にはその支流が南北に蛇新していると、この河道に伴う埋没であると想定される。また、１号流路　第２段階　が埋没していたのは、遺跡埋積による埋没土内から出土した土器と、洪水層から出土した土器の時期から、弥生時代前期中葉であり、洪水による埋没は前期後葉であると考えられる。

余談となるが、弥生時代前期中葉には調査区の西側に位置する三沢角崎遺跡３　平成　年度発掘調査）行予定　に関連を伴う集落が成立する。小都市における中期の集落は、水田経営に適した湧水を伴う台部が広く、比較的標高の高い台地上に展開する傾向が多い。三沢角崎遺跡３もその一例であるが、安定した環境に恵まれ、比較的標高の高い台地上に展開する傾向が多い。三沢角崎遺跡３もその一例であるが、安定した環境に恵まれ、比較的標高の高い台地上に展開する傾向が多い。三沢角崎遺跡３もその一例であるが、安

今回の調査で確認した土層からは、その後しばらく流路の存在は認められない。１号流路　第２段階の洪水による埋没後は、再び洪水層の堆積が認められるため、これによって流路の埋土が削平されている可能性がある。

この２度目の洪水層の堆積のうち、本遺跡の調査の見地となった水田耕作土の堆積が認められる。水田南部は確認出来なかったものの、プラント・オパール及び花粉分析からは、水田の存在を示唆する結果が出ている。水田耕作土の堆積は極めて狭い範囲にとどまるが、古代の弥生時代以前の水田の小規模区画のものが主となっており、過去の調査事例を踏まえると当な範囲にも及ぶ。但し、水田経営時の流路の状況は定かではない。層位によって異なるが次の段階の流路　第３段階　は水田耕作土を切

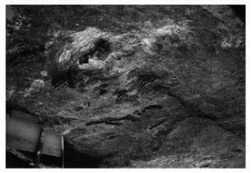
第23図　調査区周辺の遺構埋積分布（S=1/600）

写真図版

図版 4

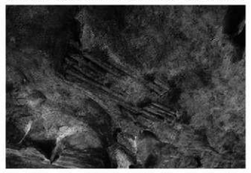
①Ⅰ区１・２号溝状遺構　完掘状況（北から）

②Ⅰ区麓部側壁面　土層断面（南西から）



③Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況（１）（北西から）

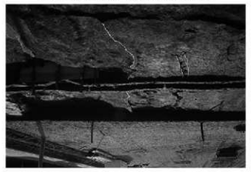
④Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況（２）（北西から）



⑤Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況（３）（北東から）

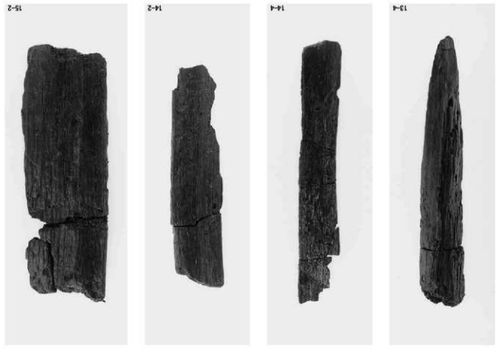
⑥Ⅰ区１号流路（第３段階）土器出土状況（南東から）

⑦Ⅰ区１号流路（第３・４段階）完掘状況（北東から）



⑧Ⅰ区４号溝状遺構　完掘状況（北から）

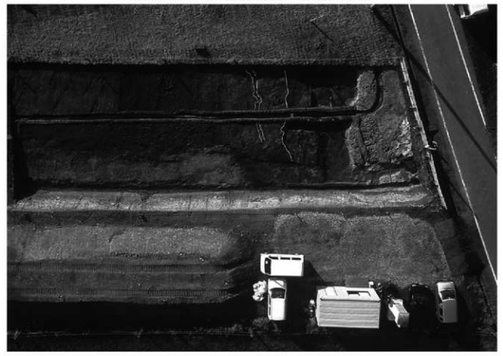
図版13



出土木製品（４）

図版１

①三沢南崎遺跡２　Ⅱ区第１遺構面全景（写真上方が北）



②三沢南崎遺跡２　Ⅰ区第１遺構面全景（写真上方が北）

三沢南崎遺跡２
小都市三沢字南崎所在遺跡の調査
小都市文化財調査報告書第　集
平成　年３月　日
発　行　小都市教育委員会
小都市小都　-
印　刷　パウエーブヤマハ
小都市力荒　-

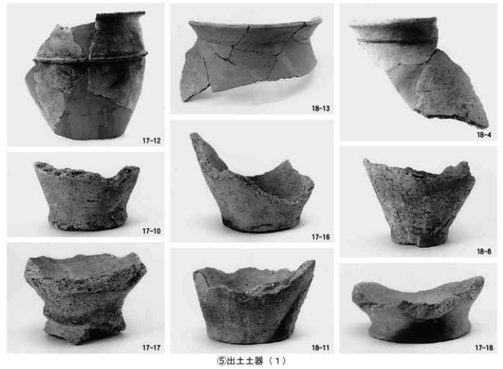
図版８

①Ⅱ区６号溝状遺構　完掘状況（北西から）

②Ⅱ区３号流路　完掘状況（南西から）

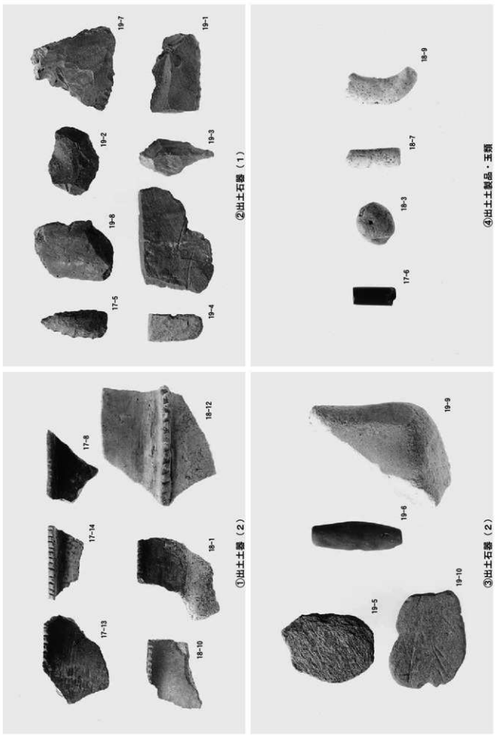
③Ⅱ区３号流路　湧水状況（南西から）

④Ⅱ区３号流路　木杭検出状況（南西から）

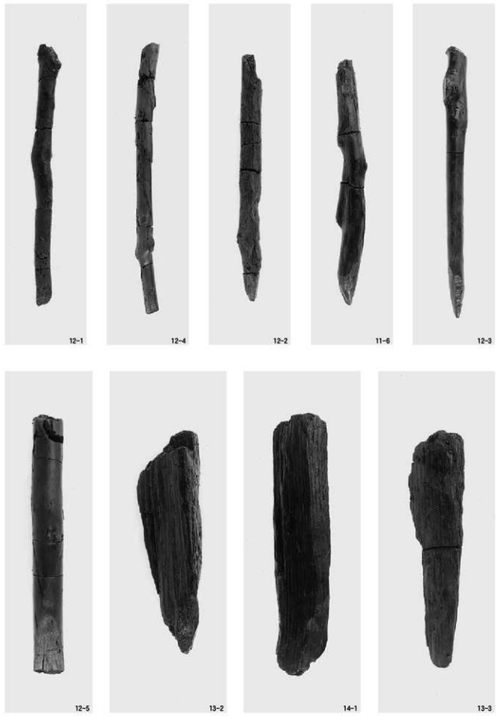


⑤出土土器（１）

図版９

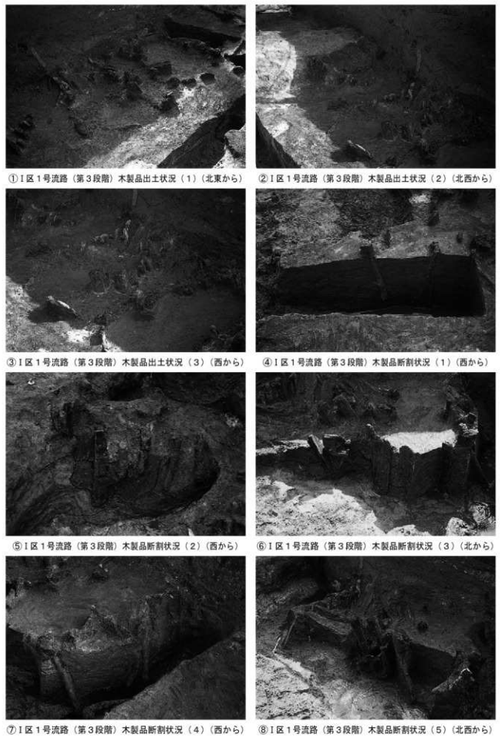


図版12



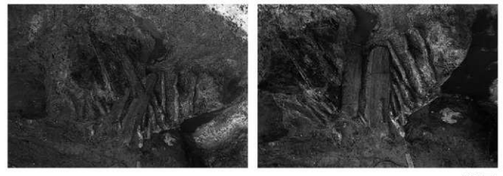
出土木製品（３）

図版５

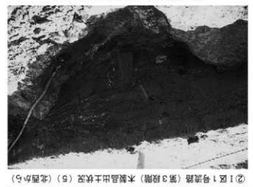


①Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況（１）（北東から）
②Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況（２）（北西から）
③Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品出土状況（３）（西から）
④Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品断割状況（１）（西から）
⑤Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品断割状況（２）（西から）
⑥Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品断割状況（３）（北から）
⑦Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品断割状況（４）（西から）
⑧Ⅰ区１号流路（第３段階）木製品断割状況（５）（北西から）

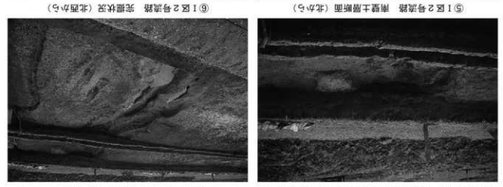
図版 6



①Ⅰ区１号道路（第３段階）木製品出土状況（４）（北から）



②Ⅰ区１号道路（第３段階）木製品出土状況（５）（北西から）



③Ⅰ区１号道路（第３段階）木製品出土状況（６）（北から）

④Ⅰ区南壁面　土層断面（北東から）

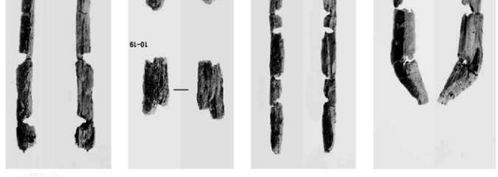
⑤Ⅰ区２号道路　南壁土層断面（北から）

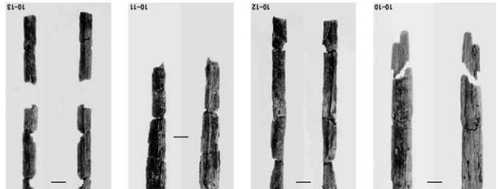
⑥Ⅰ区２号道路　完掘状況（北西から）

⑦Ⅰ区５号溝状遺構　完掘状況（北から）

⑧Ⅰ区調査風景

図版11





出土木製品（２）

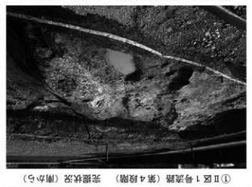
図版10

出土木製品（１）

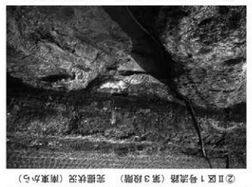
図版７

①Ⅱ区１号道路（第４段階）完掘状況（南から）

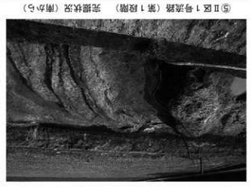
②Ⅱ区１号道路（第３段階）完掘状況（南東から）



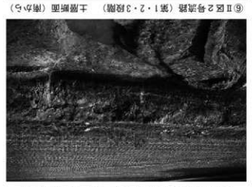
③Ⅱ区１号道路（第２段階）完掘状況（南から）



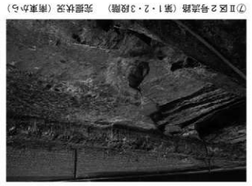
④Ⅱ区１号道路（第１段階）土層断面（南から）



⑤Ⅱ区１号道路（第１段階）完掘状況（南から）



⑥Ⅱ区２号道路（第１・２・３段階）土層断面（南から）



⑦Ⅱ区２号道路（第１・２・３段階）完掘状況（南東から）

⑧Ⅱ区２号道路（第４段階）完掘状況（北から）

図版２

①三沢南崎遺跡２　Ⅱ区第２遺構面全景（写真上方が北）

②三沢南崎遺跡２　Ⅰ区第２遺構面全景（写真上方が北）

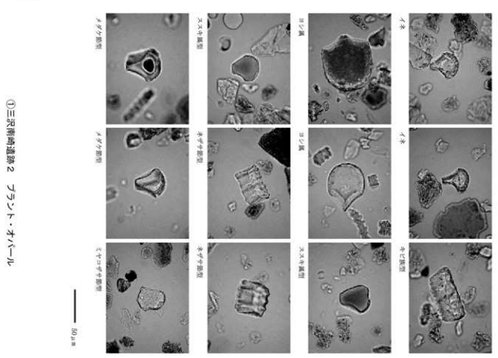
報　告　書　抄　録

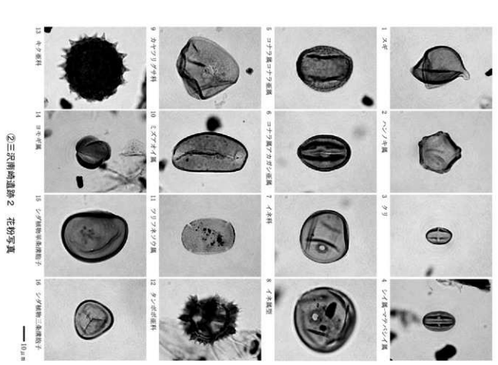
ふりがな	みつさわみなみざきいせき
書　　名	三沢南崎遺跡 2
副 書 名	小都市三沢字南崎所在遺跡の調査報告
巻　　次	
シリーズ名	小都市文化財調査報告書
シリーズ番号	第　集
編 著 者 名	上田　恵
編 集 機 関	小都市教育委員会　小都市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒　　福岡県小都市三沢　　TEL
発行年月日	平成　　年３月　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三沢南崎 遺跡2	福岡県小都市 三沢字南崎					～	㎡	県道 本郷基山線 道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三沢南崎 遺跡2	その他	弥生時代 近世	自然流路 流路 水田・溝状遺構 流路	石鏃 土器・石器 土師器 土師器・陶磁器	

図版14





図版３

①調査区上空から三国丘陵を臨む

②調査区上空から三沢南崎遺跡３（集落部）を臨む